

---

# BLU E EYE 碧き眼

ERror

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLUE EYE 碧き眼

### 【Zコード】

Z0782W

### 【作者名】

ERrror

### 【あらすじ】

主人公生上翔也は高校一年生になつたばかり。幼馴染であり神眼の一族である武神朱鳥といつもと変わらない日々を楽しく過ごしていた。しかしその日々は高校二年生になり突然変化する。

特殊な能力のある眼を持つ人物が様々な事件に巻き込まれ、巻き込んでいく。

死

それは人がかつて犯した罪に対する罰  
ならばその罪を浄化する術があったとして  
その罪を浄化することができるのならば  
人は元の完全なる人へと戻ることができるのだろう

その術さえあれば・・・

\* \* \* \* \*

一千三十年四月八日月曜日東京。

無事に高校一年生になれた生上翔也は、寝ぼけ眼の寝ぐせそのままの状態で自分の通う鏡樓高校へと向かう。

高校一年生の春休みと言えばおつくつな宿題も出ないわけで惰眠をむさぼるにはもつてこいの期間である。故に気分はだらけており彼は“春休みボケ”という言葉がピッタリな状態だ。

「あ、一今日からまた始まるのか。昼寝する時間もなくなるとか本当に勘弁だ。」

足取りも緩い状態で高校へと延びる坂道を登つていぐ。この高校の周辺は緑が豊富であり耳を傾ければ小鳥のさえずりも聞くことが出来る自然に恵まれた通学路である。しかし、この“春休みボケ”な彼には当然の如く聞こえないだらう。そこへ後ろから誰かが走つてくる音がした。

「高校一年生の門出と重なり何でだらけた格好をしてるのー。パシーン。

彼が気付いた時にはその頭に竹刀がめり込んでいた。

「ぐふつ。おーー舌でもかんだりびつするんだこの絶壁ーー！」

「絶壁言つなーー！」

パシーン。

ともう一発が彼の脳天に直撃する。

竹刀をふるう少女、**武神朱鳥**たけがみあすか。彼女は剣道の全国大会で優勝する程剣の扱いに優れている少女である。頭も賢く容姿も優れているが、胸だけは絶壁まな板という言葉が相応しい有り様であつた。

「全く。進学することができるか危うい翔也のために私は練習も休んで、一緒にテスト勉強をしてやつたというのに絶壁呼ばわりとは何事ーー！」

パシーン。

本日三度目の竹刀が彼の頭に入る。この二人は幼馴染でいわゆる腐れ縁というやつである。面倒くさがりやな翔也は勉強を全くと言つてよいほどしないため、成績優秀な朱鳥がその面倒を見ているのである。

彼が高校一年生に無事なれたのも彼女のおかげである。

「いや別に俺は頼んだ覚えなんて無いのにお前がいきなり家にやってきて勉強を始めたんだろう。あの時も寝たかったのにさーーー。」

「翔也はいつも寝過ぎなんだよーそのうち体にカビが生えるんじやないの？カビ臭い人が幼馴染とか本当に勘弁だからね。」

真剣な眼差しでありつつも口には笑みを含んでいるその様子は、この下らない会話を楽しんでいるよう見える。いつも通りの会話をしつつ一人は高校への坂を再び上り始めた。

「しつかしあ前つて何でそんな朝早くから元気なんだよ。やつぱり朝っぱらから剣道の練習をしているせいなのか？」

朱鳥の竹刀で三回も叩かれて眠気が吹き飛んだ翔也はふと疑問に思ったことを聞いてみる。

「剣道というより剣術なんだけど・・・まあそつね、頭がボーッとしていたらお父さんに殺されちゃうし、真剣で練習しているのに眠

氣がある状態で戦うなんていうのはあり得ないでしょ？

そつなく答える朱鳥。一方、翔也はそれに対して眼をひくつかせながら

いやいや真剣つて・・・そりゃ全国大会優勝して当たり前だよな「流石、神眼の一族だけあつてやつていることのスケールが違うんだな。」

そう、彼女は由緒ある神眼の家系の一人である。特徴として剣をふるう時に瞳が紅くなり身体能力は極度に向上、炎に関する魔術も使う事が可能となる。

「そうね。朝っぱらから親子眼を真っ赤にして真剣で切り合う家なんてうちくらいかもね。」

笑いながら冗談でも言つかのように、さらりとスケールの大きい事を言う少女である。

「中学校までは竹刀しか持たせてくれなかつたの。高校に入つておじいちゃんの形見の刀をくれたのよ。何でも神眼の一族が使いやすいように調整してある業物みたい。」

朱鳥の祖父は生まれた時に直ぐ亡くなつてしまつた。彼女の祖父は神眼の一族代々の中でも指折りに入る強い人物だつた。彼女が生まれる前にも、「わしが孫を鍛えてやるんじゃー！」と息巻いていたそうだ。孫の誕生を今か今かと待つていたのだが・・・。

「やっぱり真剣と竹刀は全然違うんだろうな。」

朱鳥の早歩きに追いつくため足を速めながら話を続ける。

「そりや重さも違うし刃もついてるし。でも一番違う点は火を込められることね。竹刀だとほら、燃え尽きちゃうでしょ？」

成る程、と頷く翔也。

「昔から思つていたけど火をいつでも使えるつて便利そだな。困つたらこう、ライターみたいに付けられるじゃん。」

「私の能力をライターと同列にするとは・・・。」

ため息をつき項垂れる朱鳥。コンビニで買えるような安い代物と一緒にされてはため息もでるだろう。

「私はまだ未熟だから日常生活で扱えるような火力は出せないの。寧ろ爆発的な火力しか出せなくて困っているのよ。今日も道場の床の一部を炭にしちゃったし……。」

再びため息をつき項垂れる。朱鳥は一族の中でも紅き瞳の色が一番濃く素質があると言われている。しかしこの能力は素質があればある程扱いが難しくなる。如何せん威力が高すぎるため上手く調節できないのだ。

「おかげでお母さんにまた怒られるよ……。」

しょんぼんりとしてしまった朱鳥。床の張り替えが必要だったのはつい最近まで月一だった。しかし、ここ数日は能力の威力が上がってしまったため三日に一度は張り替えが必要になつた。張り替えるたびに財布はしぼんでいくので母親にとつては悩みの種なのである。

「んなもん道場じゃなくて庭でやれば良いじゃんかよ。お前の家の庭、滅茶苦茶広いじゃんか。」

昔遊びに行つたことのある朱鳥の広い屋敷にある庭を思い浮かべながら呟つ。

「それは無理。昔やつて庭師の人につっぴどく叱られたから。大切にしていた松の木をね、全部炭にしちゃつたのよ……。」

「あーそれは庭師さん……さぞかし悲しかつたのだろう。」

と庭師の悲痛な念をねぎらう翔也。

「でもこんな事で気を落としてられない。今日から高校一年生になつたんだから気持ちをリフレッシュしないと……。」

顔を再び晴れやかにして士気を上げる朱鳥。

「ほらもうすぐ学校に付くよ。クラスわけどうなつたのかな。」

気持ちを切り替えて愉快な足取りで校門へと向かう朱鳥。

一方の翔也は……。

朱鳥と一緒にクラスになりませんように! あいつがいると授業中も寝ることができないつ

と願つていた。しかし小学生の頃から何故か一人とも同じクラス

なので、半ばあきらめでいたりもする。

何ですつと同じクラスなんだよ・・・。絶対に教師の策略があるだろい。

と疑いながら校門へ駆けていく朱鳥を眼で追う。

校門の近くにある掲示板に貼られたクラス分けの内容の前には人だかりができていた。これから一年の運命を左右するだけあってすごい賑わいである。その表情は様々である。喜んでいる者もいれば、がっかりと頭を垂れながら別れ挨拶を言う者もいた。大勢の人だからの向こう側から背伸びしながら小さい字で書かれた自分の名前を探す。

えーっと。一年五組か。

そこへ横から緑色の髪の少年が話しかけてきた。

「おい、翔也俺のクラスも確認してくれないかな。」

「あー葉平か。お前も俺と同じ五組だよ。」

この縁髪の少年は下光葉平。じもみつようへい 双子の弟である。背はそこまで高くないためこの人ばかりでは掲示板を見ることができないのだ。

「あれいつも一緒にいる葉也はどうしたんだ?」

「兄貴のやつはもう教室に入つて行つたよ。六組みたい。」

ふむ、と頷きながら

「流石に双子が一緒のクラスになるといことはないか。」

「寧ろ一緒のクラスだつたら困るつて。入れ替わりできないじゃんか。」

生真面目な顔でとんでもないことを話す葉平に驚きつつも

「やっぱり・・・そういうことやつてんのか。」

「当たり前だろ。その方が便利じゃないか。」

「だろうな~。」

双子である利点を羨ましそうに思つ。そこへクラスの表を見終わ

つた朱鳥が戻つてくる。

「翔也ー。私五組だつたけどどうだった?」

その声を聞いた途端に憂鬱な表情に変わる翔也・・・

「夢も希望もね———」

「どういつ意味よー」

パシーン。

本日四度目となる竹刀が翔也の頭に叩きつけられた。

## 1・2 日常から非日常へ

「一年五組の教室内には生徒が集まりつつあった。

「流石にハクラスもあつただけに見知った顔が少ないな」

翔也は叩かれた頭を押さえながら言う。お互いを知らないので自然と同じ部活、委員会、クラスだったであろうグループが出来ていた。無論グループとも言えるほどの人数ではないが、翔也、朱鳥、葉平も周りと同じように集まっていた。

「毎回思うけどクラス替えってなんでするんだろうね？」

首をかしげながら朱鳥は言う。

「クラス替えってしない方が担任の教師も楽なのにね。」

「それだと人間関係が広がらないからだる。」

「お、珍しく真面目な意見を言つね～ 翔也。」

感心しながら葉平は言つ。

そこへ担任の教師が入ってきた。

「おーいお前ら。もう予鈴が鳴ってるんだから座れ。」

氣付かないうちに予鈴が鳴っていた。生徒たちはあらかじめ定められていた座席表通りに座つていく。皆お互いを知らないためおしゃべりは一切なく静かな教室である。

このクラスも数日すればどうせ五月蠅くなるんだろうな・・・  
頬付きながら氣だるそうな目で周りの緊張している生徒を見る翔也。

「さて・・・寝るか・・・。」

初日から顔を伏せ寝始める翔也であった。

放課後、今日は初日なので午前中で学校は終了する。

「翔也、早速寝てたでしょ。」

朱鳥はウンザリしながら話しかける。

「んあー。だつて今日はこれから簡単な説明だつたひ。」「で、どれくらい覚えてるの？」

疑いの目で見つめる朱鳥。その視線から眼を反らしながら・・・。

「んーと。何・・・話してたっけ・・・？」

すかさず竹刀が襲いかかってくる。

パン。

「ぐあ！」

小さな悲鳴をあげる翔也と、両手いっぱい力を込めている朱鳥。

「あんたはどうしてそうなのなかな？気が緩み過ぎじゃないの？ほ  
ら後で教えて上げるから感謝しなさいよ！」

翔也を叩いた竹刀で肩を軽く叩きながら言つ。

「ほら、さつさと帰るよ。」

早歩きで教室から出ていく。翔也はその後をノロノロと追いかけ  
ながら出て行つた。

長い下り坂の坂道を一人で下つていく。

「そういうや葉平のやつはもう帰ったのか？」

「終了の予鈴が鳴つた後に直ぐに教室を出て行つたよ。6組に来た  
転校生に興味があつたみたい。」

「わざわざ編入してきたのか。」

「そうみたいね。」

「どんな奴なんだ？」

転校生ともなれば若干の興味はわく。特に高校での転校生は珍し  
い。

わざわざ編入試験なるものを受けなければならないからだ。

「んー、私も見てないからなー。明日にでも葉也に聞いてみれば?  
6組だつたでしょ。」

「そういうやうだったな。」

朝の葉平との会話を思い出す。

一人は雲一つない青空の下歩き続ける。

「あ、そつそつ。さつきの学校での連絡事項は携帯のメールに送つ  
とくね。」

「おー、ありがとう。」

単純に反応しただけのように言葉を返す。

「あなたの感謝の言葉には気持ちが入ってないわね・・・。」

「だつて・・・眠いし・・・。」

眼を半ば閉じながら歩く。すると自宅が見えてきた。

「んじや、また明日一。」

「おーう。」

朱鳥と別れ自宅の扉を開ける。すると見慣れない靴があつた。  
ん、誰だろこれ？ -

疑問に思いつつリビングに入つていいく。そこには従兄の啓祐さん  
がいた。現在雑誌記者をしており、年齢は翔也よりも10歳年上で  
ある。時々食事をしに生上家へ来る。

「やー翔也、今日から高校一年生なんだってな。」

「あーはい。」

椅子に座りながら返事をする翔也。台所では母親が昼食を作つて  
いる。

「珍しいですね。兄さんが昼間にうちにくるなんて。」

「実は今ある殺人事件を追つていてな。その調査でこいら辺まで來  
たから、序にお昼を御馳走になろうかと思つてね。」

殺人事件か

「それつてもしかして、両目がくり抜かれた死体が出る事件？」

「そうだよ。ついに日本まで来ちまつたからな。」

両手を組んだ上に顎をのせながら言つ。

両目がくり抜かれた殺人死体。この事件は初め欧州の方で起きた。  
今年の一月イギリスを初めとして、ドイツ、フランス、ギリシャなど  
歐州諸国で両目をくり抜かれた死体が連續して出た。死因は四肢  
が切断されたことによる出血多量によるショック死。欧州での事件  
とあつて日本では殆ど注目されることはなかつた。しかし、四月に  
入り遠く離れたこの日本で両目がくり抜かれた死体が発見される。  
こうして日本でもこの事件が取り沙汰されるようになつた。

「でも欧州とは犯人がどうも一緒ではないみたいだね。」

「どううと？」

「まず、仏さんはちゃんと四肢が付いているんだよ。死因はナイフによつて刺されたことだけね。」

「成る程。でも、それだけでは同一犯ではないつて言いきれないと思うのですが？」

「うん、そうだね。でも今でも歐州では殺人事件が起きているから違うと言えるのだよ。」

そつか、ともつともな根拠に頷く。

「日本では一人が殺されていましたつけ？」

「昨日までは一人だつたが、今朝がたまた一人発見されてね。これで合計三人だよ。」

「あ、今日も見つかったのか・・・。」

今朝起きて着替え、直ぐに学校に行つたのでニュースを見ていいので知らなかつたのである。

「どこで発見されたんですか？」

「東京だよ。前の二人は石川県だつたのにな。だから今日わざわざ東京まで戻ってきたんだよ。」

はーとため息をつきながら言つ。

「全く、一昨日取材しに行つて今日戻ることにならうとは。着いたその日に取材が終つたから、どうしようか迷つていたんだけどね。」

「それはご苦労様です。」

そこへ母親が昼食持つてきながらリビングにやつてきた。どうやら焼きそばのようである。

「啓祐くんごめんねー。来るつて知つていたらちゃんとしたのを作つたんだけど。」

と翔也と啓祐の前に焼きそばを置く。

「いえいえ。いきなりお邪魔してしまつたので、お昼を頂けるだけでも十分です。ありがとうございます。」

と言いつつ箸を手に取り焼きそばを食べ始めた。翔也も箸を手に取り食べ始めた。

「んじゃ私はちょっと買い物に出かけるね。」ゆづく。  
そつ言いながら母親は荷物を持ってでかけた。

黙々と焼きそばを食べ続ける一人。

「御馳走様でした。」

「一人とも手を合わせて言つ。

「さて、そろそろ仕事に戻るかな。」「背筋を伸ばしながらあぐびをする。

「俺は部屋に戻って寝るかな。」「同じく背筋を伸ばしながらあぐびをする。

「高校生は気楽で良いね。」「羨ましそうに見つつ、席を立ち玄関に向かう。

「では、また遊びに来るね。」「はい、さようなら。」「はい、さようなら。」

玄関を開け出していく。翔也は扉を閉めた後に自分の部屋へと戻つていいく。階段を上り自室の扉を開け倒れこむようにベッドの中に潜り眠り始める。午後7時、母親に夕飯ができたと起こされる。いつの間にやら五時間近くも眠つていたようだ。

あー良く寝た

背筋を伸ばしながら布団から起き下に降りていく。夕食後再び部屋に戻った時に携帯が鳴る。朱鳥から学校での連絡事項に関するメールだった。どうやら明日教科書販売があり、明後日から授業が始まるようだ。それらを確認した後に携帯を閉じる。

さて、何するかな。

昼に五時間も寝たため眼がすっかり冴えてしまつていて。そういう時にはよく窓の外を眺める。翔也は昔から視力がやけに良い。掲示板に貼られたクラス替えに関する表がはつきりとわかつたのもそのためだ。窓の外を見れば遠くにある町まで翔也には良く見える。勿論窓の中まではつきりと見ることができる。プライバシーに関わるので出来るだけ無視しているようにしてゐるが、見えてしまうのは仕方ない。

そうして、寝静まつた町を眺めていた時にふと不審な窓を見つける。時間は深夜一時。ここから5kmはあろう高いビルの窓だ。その中では一人の人が逃げ惑っていた。そのビルには明かりがついていため、男か女かはわからない。ともかくその人の周りをナイフが飛び交っていた。まるで空中で飛んでいるようだ。

窓に手をつき、思わず驚き食い入るように見つめる。

あれはもしや連續殺人事件の一つなのでは……。

今まさに人が殺されようとしている場面を見てしまい、動悸が激しくなる。

このままでは今逃げている人が四人目になるのだろうか。

眼に見えている光景が信じられない。そこにナイフを投げている人物が目に入る。暗くフードも被っているため、顔を確認することができない。ナイフを投げるその様子は踊つていて見えた。次々と空を切り、舞うナイフ。

このままでは、あの人は殺されてしまう！

そう思い携帯を手に取り警察へ通報をしようとする。しかし、あのビルの住所がわからない上に名前も見えない。恐らくこちらから反対側にビルの名前が書かれているのだろう。決心したように部屋から出て玄関に向かう。両親が起きないように、静かに素早く階段を下りる。靴をはき自転車のを取りに行く。

道はわからないけれど、あの高いビルなら見失わずにすむだろう。

そう考えつつ素早く鍵を指し自転車に飛び乗り自宅を出る。自転車を速く進めながらビルを目指す。徐々に近づくにつれ、解体中のビルであることに気がつく。外壁には工事用の足場が設けられていたためである。

しかし、それはまだ途中であった。そのため偶然あの窓が見えたのである。

俺が到着するまで間に合つか。

足を懸命に回し続ける。こうして数分後ビルの前に到着した。

ビルの名前は

「110番を素早く押す。

「もしもし、何がありましたか？」

「冷静なトーンの声だ。」

「鏡樓市にある解体中の『テイルク』というビルの中で人が殺されかけています！」

警察官に伝わるか伝わらないかの速いスピードで告げる。

「わかりました。パトカーがそちらに向かっているのでそこにいて下さい。」

「はい。」

と言いつつ携帯を切る。しかし安心することができない。このままパトカーを待っていても間に合わないかもしれない。ビルの周りは工事用のオレンジのフェンスで囲まれている。しかし乗り越えられなくもない高さである。よしつ、行くか。

そう決心しフェンスを乗り越えてビルの中へは入つて行った。

ビルの中に入ると明かりもなく真っ暗だった。眼が慣れるのを待ちつつエレベーターを探す。目が慣れてきて、ここがかつて広いロビーであったことに気付く。懸命に眼をこらし探し続ける。すると左側にそれはあった。駆けよって直ぐにボタンを押す。

やっぱり動かないか・・・

ボタンを何度も押すが、カチカチとむなしい音が鳴るばかりで光る事はなかった。

そうだ、階段は。

階段を探すとエレベーターの横にあった。そこに駆け込みビルの階段を無我夢中に上っていく。一階程登ると工具の置かれている踊り場に出た。解体中のため工具は置きっぱなしにされているようだ。そこで、自分が武器を持つていないことには気が付き立ち止まる。さすがに手ぶらはやっぱそうだな。

工具箱を開ける。そこには釘、ハンマー、バールなど武器に使えそうなものから役に立たなそうなものまであった。その中からバールを選択し工具箱を離れ再び階段を昇り始める。空気は酷く濁んでおり走る度に埃が舞う。光りは窓からの月明かりのみで、視界が悪い。更に一階程登つてあることに気がつく。

そういうえば、あれは何階なんだ？

自分がからはビルの足元まで見えなかつたため、あの窓が何階であるのかがわからなかつた。

エレベーターが動かないのだから、階段を登つていればそれ違うだろ？

そう考えひたすら登りつづける。更に五階程登つて息が切れ始めた。普段あまり運動はしないのに全力で登り続けたので、息が上がつてしまつたのだ。一回立ち止まって息を整えようとした時に、上から足音が聞えた。

この上か！

立ち止まらずに再び登る。色あせた数字を見ると二〇三〇は十階のようだ。階段から覗くと、広い部屋の中で女性がコンクリートむき出しの柱に隠れながら逃げ回っていた。部屋の中は壁が全て打ち抜かれており、コンクリートの柱が一〇m間隔で並んでいた。

月明かりが女性を照らす。ナイフによる傷で顔から足まで血だけになっていた。外見はどこかのSAPを思い出させるような格好だった。そして手には黒く光るもののが。

拳銃！？

やはり一般の人ではないようだ。日本の中で拳銃を持つことができるのは、限られた人々だけである。

女性が発砲する。発砲音が響き、弾がコンクリートに当たる乾いた音も響く。

「来るなっ！」

悲痛な叫びを上げる。するともう一つの足音が部屋の奥から聞こえる。階段からは奥まで見ることができないため、その姿を確認することができない。

ヒュツツとナイフが空を切る音が聞こえたかと思つと、一本のナイフが女性をめがけて飛ぶ。柱を挟んで一本ずつ向こう側の壁に刺さる。

「なんのつもり！？」

恐怖が入り混じった声で叫ぶ。その言葉が言い終わらないうちに四本のナイフが空を切る。一本が柱に突き刺さつた。すると残りの一本は軌道を急に変え女性と柱を囲むように回り続ける。

「いやああああああああああああああああ！」

狂ったように叫びながらナイフに向かつて撃ち続ける。ナイフはそれを無視するように飛び続け速度を増して行く。柱の反対側に飛んでいた一本が刺さつたと同時に、女性の動きも止まる。何が起きたんだ・・・。

女性は柱に縛り付けられたように動かなくなる。よく見ると月明

かりを反射して光る細い糸が女性を柱に縛っていた。

そうか、あのナイフにはワイヤーがついているのか。

敵はどうやらナイフとワイヤーを使って戦うようだ。

縛られてもがく女性に向かっていく足音。翔也の眼にその人物が映る。体格は小柄。ズボンと大きめのパークーを着ており男か女か区別することは出来ない。やはりフードを深く被っているため顔も判別することは出来ない。そして左手には刃が15cmものナイフが握られていた。

それを女性の喉元に付きつける。

「何でも言ひ事を聞く！だからっ・・・命はつ！」

その言葉を無視してナイフを首に向けて横から突き刺そうと振り上げる。

マズイ！

と思いつと同時に体を動かして敵に向かって走る。距離にして5m。その距離を素早く縮め、力を込めてバールを振り下ろす。が、それは当たらない。

速いっ！

真横に避けられると同時に左手にあつたナイフが投げられる。それは右肩に深々と刺さる。思わずうめき声をあげ倒れそうになつた体を柱に隠す。

「くつ・・・貫通してやがる」

刃が15cmもあるナイフが柄元まで刺さっていた。肩を動かそうとするたびに体中に激痛が走る。直ぐ横にいる女に話しかけるが、どうやら気絶してしまつたようだ。バールを左手に持ち替えて考える。

相手は素早い。俺では追いつくことは出来ない。警察が来るまで女性を守りつつ逃げるしかないか！

そう覚悟を決めた途端に、ナイフが四本ずつ自分の左右の地面に突き刺さる。隠れた柱の向こう側から聞こえる足音。それは静かに、しかし速く迫つて来ている。

「うなつたらバールを何としてでも当てて、応戦するしかないつ。

そう覚悟を決め柱から飛び出す。距離を縮めようとして敵を確認する。その両手には8本の大小様々なナイフが握られていた・・・。

危機を感じてすぐさま柱に隠れる。さっきまで自分のいた場所を8本のナイフが通り過ぎ、壁に突き刺さる。同時に、壁の表面が埃を撒き散らしながら崩れる。

あれに当たつたら、間違いなく死ぬな・・・。うなつたら柱を移動しながら近づくしかないか。

右手にある柱に向かつて駆けだす。それを見越していたかのように柱に付く前に眼の前にナイフが刺さる。思わず足を止める。ヤバいっ！

振り向いたときにナイフが二本心臓に向かつて迫っていた。慌てて体を左に倒しながらギリギリで回避する。

『um den rechten Arm』

左手を伸ばしながら敵が初めて口を開く。すると空中でナイフはいきなり止まり、右腕に向かつて真横に切りつけてくる。ワイヤーで制御してるのかつ！

避けられずに右腕を深々と切られる。そのまま真後ろに倒れこんでしまう。敵は此方に向かつてゆっくりと歩いてくる。

『Beschleunigen ge

そう言つと同時に敵は翔也の目の前に立つてた。

何だ・・・これはっ！？

あり得ない光景に眼を疑う。20mは向こうにいたであろう敵が一瞬にして距離を詰めてきたのだ。右手の指に挟んだ一本のナイフを振り下ろす。それを左手あるバールでを弾ぐ。

ガキン！

辛うじて軌道を反らす。相手が姿勢を崩していいのうち、跳ね上がるよう立ちあがり柱に向かつて走り隠れる。

あの移動速度は尋常じゃない・・・。あいつ人間なのか？

これは敵には距離というものが関係のないものであるといふこと

になる。今は辛うじてバールで軌道をそらして回避できたが、次も成功するとは限らない。

クソッ、警察はまだなのか！？

右腕から流れ続ける血。気付くと意識が飛びそうになってしまってた。頭に酸素が回らなくなってきたのだ。しかも日頃運動不足であつたため、体力も限界に迫っていた。敵がゆっくりと此方に向かってくる。両手には8本のナイフ。

『Zero rest? running』

左手のナイフが空を切り柱にあたる。柱は碎かれ、粉々になり降り注ぎ埃がまう。

さつきより威力が上がってる！？

それを後ろに下がりながら避ける。そこへ埃のモヤの中から4本のナイフが飛び込んでくる。

「ぐああああああああああああああああ！」

今まで経験したことのない激痛に雄叫びをあげる。3本が体に突き刺さりうち2本はあばら骨を碎いた。口の中に広がる血の味。気持ち悪くなり吐きだしむせる。“殺される”というさつきまで非現実だったものを現実で突き付けられ、絶望する。

俺は、ここで死ぬのか。

絶望に落とされた表情を見て頷く相手。それを見て自分の考えていること全てが見透かされているような気がして、背筋に悪寒が走る。

敵は口元を覗かせ・・・笑っていた。

その口元は冷酷、残忍、非情、無慈悲。

両手には再び8本のナイフがいつの間にか握られていた。

終わりか

そう諦めた時に敵は体の方向を急に変えた。そう柱に縛られている女性の方へと。

「止めるつー」

そう叫ぼうとするがあばら骨が碎かれ肺が傷ついたのだろう。か

すれた声しか出さない事ができなかつた。敵は右手のナイフの一本を女性に向ける。

『T o d』

そう呑くと投げられてもいなイナイナイフは勝手に女性に向かつて直線に向かう。

「止めるおおおおおおおー！」

叫びながらその右腕に向かつてバールを投げつける。  
しかしバールは右腕に届かなかつた。

光る細い糸。

ワイマーか！

バールはその右腕に届かずワイマーに止められてしまつたのだ。  
女性に向かい続けるナイフ。

俺は、誰も守れないのか  
自分の無力を呪う。  
自分の脆弱さを呪う。  
自分の非力を呪う。  
自分の・・・。

女性にナイフが刺さる。鮮血が舞う。月の光に照らされて。

そこへ敵の意外な表情が目に入る。その口元が、笑つておらずむしろ歯を食いしばつっていたのだ。意外な敵の表情に疑問を持つ翔也。そこへサイレンの音が割れた窓から聞こえてきた。警察が来たのだ。

だ。  
何で、今更っ！

やり場のない感情を抱く。

敵もサイレンの音に気付いたのか、慌てるそぶりを見せる。

『R ? c k b a b e』

敵がそうつぶやくとあちらこちらに散らばつていたナイフが、敵の眼の前に集まりその体に消えていく。翔也の右肩のナイフも無理

やり引き抜かれる。

ぐあ！と叫びを上げる。同時に視界がぼやけ始める。そしてそのナイフも敵の体の中へと消えてゆく。

全てのナイフを集め終わった敵は近づいてきて左手で無理矢理翔也の顔を押し上げる。抵抗しようにも体にはまったく力が入らない。持ち上げた顔に向かつて自分の顔を近づける。

フードの間から覗く口元は円満な笑顔が。しかし、本来は美しく見えるであろうその口元は酷く歪んで見えた。

「みーつけた。」

そのような音を呟いたかと思うと、コンクリートの地面にむかっていきなり顔を落とされる。意識が遠のいていく。

敵はエレベーター横の階段へ向かつていく。その足取りはどこか楽しそうに見え、とても不気味に見えた。

あいつは一体誰なんだ・・・。

そして翔也の意識は途絶えた。

眼の前に広がる無の世界。その色は黒。今にも吸い込まれそうになる。

「ここは、どこだ？」

その闇に吸い込まれてはいけないといふことを本能的に理解する。もがこうとするが体は動かない。抵抗することもできない。クソッ！

必死に体を動かすと意思を働かせるが、全く動かない。まるで他人の体のようだ。

あがこつとしているうちにその闇が目前に迫る。

「もうすぐ俺は死ぬのか。」

根拠もなしに自分が死ぬということを知っている。つまりそれは眼の光景が死の世界と言つ事になる。しかしそこには世界と呼べるような空間があるようには思えない。

そこには“無”しかないからだ。その時突然眼に激痛が走る。

「ぐああああああああああああああ！」

あまりの激痛の酷さに悲鳴を上げる。何かに押しつぶされ破裂しそうな痛さだ。眼を抑えようとするが体が動かない。それに構わず激痛は酷くなつていく。

すると眼の前に沢山の文字が広がり始める。体にも沢山の文字がまとわりつき、這いまわる。眼の前の光景も文字によつて凄い速さで満たされていく。その動きは明確な意思を感じる。

文字は空間全体に広がつていく。まるで自分と、その世界を隔てよつとしているようだ。

気がつくと自分は死の世界に吸い込まれることはなくなつていた。逆に遠ざかっていくのを感じる。体の自由がきくようになり、意識もはつきりしてきた。

目覚めた時に自分はこの世界の事を覚えているのだろうか・・・。

ふとそんな疑問が浮かぶ。

背後から淡い光を感じる。気付けば体中が文字と光りに満たされていた。

\*\*\*\*\*

心臓の心拍数を数える機械の音が聞こえる。一定の間隔で鳴り続ける。それは監視している人が生きていることを示す。

意識が少しづつ体を満たして行く。目を開けると窓から日がさしていた。

左手に誰かが触れている間隔を感じる。その手は強く握られていた。握っている人物の髪は黒く長かった。

「朱鳥・・・?」

小さい声で呟くとその人物は顔を上げた。そのままの下黒ずんでいる。殆ど寝ていないうだ。

「翔也！…！」

いきなり抱きつかれる。

「どんだけ心配させるのよ。」

ぐぐもつた声でそう呟く。

「ごめん・・・。」

何となく謝った方が良い気がするので謝る。どうやら相当心配をかけてしまったようだ。段々と自分の身におきていたことを思い出す。

ナイフ操る謎の人物。月の光の中で倒れた女性。

「そうだ！あの人是助かったのか！？」

唐突に大きな声をだす。あの人は助かったのだろうか・・・。いや、あれでは無理かもしれない。

「あの人・・・？あ、翔也と一緒に運ばれた女の人の事？何とか一命はとりとめたみたい。ただかなり重症で意識を回復する見込みがないんだって・・・。」

「そつか・・・。命は助かったのか。良かつた。」

自分のしたことが無駄ではなかつたことに安堵する。

「翔也も意識回復するかわからなくて凄い心配だつたんだよ。だつてもう三日もたつし・・・。」

「三日も！？」

自分が三日も寝続けたことが信じられない。三日と言えば72時間だ。きっと人生の中で最高記録だろつ。これからもその記録は打ち破られることはないと思う。

ということは今日は十二日なのか。

「そういえば母さんとかは・・・？」

「今、私の昼ご飯を回に言つてくれてゐる所。そうだー早く知らせなきや！！」

そう言いながら立ちあがり、駆け足で病室を出て行つた。

その後二日で退院することができた。医者も異常な回復の速さに驚いていた。更にあんな大けがをしたのにその傷跡は残つていなかつた。

退院する前日に氣になつたのであの女性のお見舞いに向かつた。医者からの話によれば一命を取り留めることは出来たので、後は意識を回復するのを待つだけだそうだ。

久しぶりに自宅へ帰る。まだ退院したばかりなので一週間は学校を休むようにという医者からの御達しがでた。よつてこの一週間は暇をもてあそぶ事ができる。・・・と思つていた。

「翔也、警察の方がお話を聞きたいそうよ。あと啓祐くんも聞きたいんだつて。」

というわけで事情聴取が始まるのであつた。それで四日は潰れることとなる。警察も初めての目撃者といつことで色々と聞いてきた。同じ質問を何回も聞かれたりとぐつたりする様な四日間だつた。

そして今日は啓祐兄さんから話を聞かれる人なつた。正直かなりウンザリしている。似たような質問をされることは日に見えているからだ。

インター ホンの鳴る音がする。ビリビリ來たようだ。階段を下りて玄関に向かう。

「やあ。翔也、色々大変だつたみたいだな。」

「はい、色々と大変でした。」

「うんうんと頷く兄さん。

「家でも話すのもなんだし、ちょっと駅前の店にでも入らないかい？」

「あーはい。」

駅前には商店がありここからもそんなに遠くはない。徒歩5分ほどで到着する。夕方前とあって商店街には沢山の人々が溢れていた。「しつかし全然変わらないなこの景色は。いや、技術もほとんど進歩してないな・・・。」

「やっぱり一千十三年の事件が原因何ですかね？」

「お偉い学者さんにもわからないことが俺にもわかるわけないだろう？」

「一千十三年五月二十日。太平洋中心で謎の大爆発が起きた。最初はアメリカによる水爆実験であると取り沙汰されたが、それはただの爆発ではなかつた。爆発の起きた部分の空間が消えたのだ。結果、海流変動も起き季節が変わつてしまつた。そうなれば世界情勢も大きな変化を遂げる。後進国による飢餓の発生により政権が不安定な国々が続出した。そんな中、第三次世界大戦を回避することができたのは国連の起こした奇跡と言えよう。

しかし人類にとつて一番深刻だつたのは、科学技術の停滞だらう。あの爆発事件以来科学技術の進歩が全くと言つて良いほどなかつたのだ。そのため、一千十三年から世界は止まつてしまつていると言つても過言ではないだろう。

「あの爆発事件が起きた時のことはよく覚えているよ・・・。日常生活が崩壊していくさまが眼の前で繰り広げられ、俺も巻き込まれたからな。実際雑誌記者になつたのも、あの事件の事実を知りたかったりするからなんだ。」

どこか遠くの過去を見るような眼をする。

「さてさて、これから暗い話をするつていうのに今からこんなでどうするんだか。この話をは終わり。んじゃあそこの店にでも入るか。」

そう言いながら赤い看板ファーストフード店へと入つていった。店の中は表と同じように沢山の人々で賑わっていた。見慣れた制服を着ている高校生も何人か固まつて座つていた。

カウンターへ行きいくつか注文する。お金は兄さんが持つてくれた。適当な座席を見つけて二人で座る。

「さて、そろそろ始めよっか。」

「はい」

先程買つた炭酸系のジュースを飲みながら話を聞く。

「まず、犯人の顔をみたかい？」

メモを片手に聞いてくる。

「いえ、フードを被つていたため全く見えませんでした。体格も小柄と言う事だけで男か女かも全くわかりませんでした。」

「成る程。犯人に繋がる有用な情報は持つていないのか。」

「はい。」

「凶器はやつぱりナイフだった？」

「はい。でもただのナイフではありませんでした。」

「ど、言うと？」

表情を時に買えず此方の顔をジッとみ続ける。

「ナイフにワイヤーみたいなものを付けていました。後、聞いたことも無いような言葉を呴いてました。」

「ふむ、その言葉は覚えてる？」

「えーと、よく覚えてないです。英語とも違つよかったですしね。でも英語にはなんとなく似ていたような気がします。」

頷きながらメモをとっている。

ある程度書き終わると、少し考え込むようにボールペンを額にあてる。兄さんの考えている時に出る癖である。暫くして口を開く。

「そいつは日本語も喋ってなかつた？」

「あ、そういうえば喋っていました。」

「日本語も喋れるのか。つまり日本人である可能性もあるのか。こ

れは厄介だ……。」

更に深く考え込んでしまう。

「他に気になつた点はなかつたかな？」

「他には・・・やっぱりナイフが体の中に消えていたことですかね。」

「ナイフが体の中に？それは刺さつたということかい？」

「いえ、体の中にこう消えていくような感じでした。」

「それはただの人間ではないようだな。」

「かと存ります。」

この事は警察にも話したがあまり信じてはくれなかつた。記憶が

混濁していると俺を疑つてはいるようだ。

「兄さんは信じてくれるんですね。」

「そりや勿論。神眼なんていう能力を持つ人を何人か知つてはいるからね。これくらいじや驚かないよ。」

「そんないるんですか・・・。まあ朱鳥もいますしね。」

うんうんと頷く兄さん。伊達に雑誌記者をやつてはいるわけではないようだ。神眼の能力を持つてはいる人は朱鳥しか知らない。他にもいくつか能力があるようだ。

「あのー、神眼の能力つてどれくらいあるんですか？」

「俺が知つてはいるのは、物や現象を言葉によつてあやつる言靈とか朱鳥ちゃんのような炎、雷とかもあつたね。そう考へるともしかしたらあの犯人は神眼所持者で能力は言靈かもね。だとしたら厄介だ。」

ため息をついて煙草に火を付ける。

「どうして厄介なんですか？」

「言靈という能力はね洗脳することもできるんだよ。記憶を思い出せなくしたりね。だから追いついて見つけても思い出すなと言われ

たら思い出せなくなつてしまつ。」「

「それは確かに厄介ですね。」

ストローを吸い込むが口の中に飲み物が入つてこない。いつの間にか飲み物が空っぽになつっていた。

「ちょっと水貰つてきますね。」

おり、とタバコを右手であげながら煙を吐く。

能力者つて沢山いるのか。どんな能力があるんだろうか・・・。

兄さんとの会話は警察との会話と違つて様々な情報が手に入るのを退屈はしない。

しかし、これ以上もう話せることはない。あの事件については思い出せる限り思い出したからだ。ただ一番重要だつた何かを思い出すことができない。その違和感だけが頭の中に残る。一番重要だつたであろうことが思い出せないのだ。

言靈の能力で思い出せなくなつたのかな・・・。

カウンターに到着すると人が先ほどよりも沢山溢れていた。その中に縁髪で顔が良くなつた一人を見つける。葉平と葉也だ。どうやら帰りがけのようだ。

「葉平、葉也久しぶり。」

右手を上げながら声をかける。此方に気付き同じ顔が此方を向く。この双子は本当に瓜二つであるが、葉也は眼鏡をかけているので見分けは簡単だつたりする。

「翔也じゃないか。あの事件に巻き込まれたようだけがはもう大丈夫なのか?」

心配そうに尋ねてくる葉平。

「あまり無理はよくないぞ。けがの治りが悪くなるからな。」

眼鏡の位置を治しながら葉也も呟つ。

「もう大丈夫だつて。そこまで酷くはないんだ。ただ医者に止められているから、休んでいるんだ。寝れるから結構良かつたり。春休み延長みたいに考えているよ。」

「おい、また。医者から休むように言われているのに何故外出して

いる。さつさと帰つて寝ろ。」

「まあまあ良いじゃんか葉也。んじゃ体調に気をつけろよ。」

葉平が葉也を引っ張りながら店を行つた。

さて、俺も水を貰つてさつさと戻るかな。

それから程なくして取材は終つた。もう特にほなせる」ともなかつたので、特に進展はなかつた。兄さんには自宅まで送つてもらつた。

「翔也、お前は間違いなく犯人に命を狙われている。だから一人で外出するんじゃないよ。命がおしければ絶対だからな。」

「わかりました。」

月明かりの中、兄さんからのありがたい忠告を受け取る。もつとも外出する気はさらさらなかつた。一人で外出してはいけないというのはかなり行動を制限されるが、寝て過ごすつもりである俺には関係ないことだ。

こうして事件から八日目、一千三十年四月十七日が終つた。

## 1・5 殺害未遂現場

四月二十日土曜日。時刻は朝九時。空は雲一つない快晴。兄さんの取材を受けた後は予定通り一日中寝て過ごした。部屋から出るのは食事の時のみ。この食事もインスタントである。何故なら両親は共働きであまり家にいないからだ。朝早くに出ていき夜遅くに帰る。息子が命の危機にさらされているというのに、特に気を留めていないようだ。土曜日の今日も普段通りに出かけて行った。結果、俺は春休みの悪習をそのままにした状態である。これでは体に力ビが生えてもおかしくはないかもしない。

ニュースを見るにまだ事件は続いているようだった。生存者は俺とあの女性のみ。そして女性はまだ意識が元に戻らない。つまり、俺が犯人にとっての汚点ということになる。

よつて、家の前には不審車両・・・もとい警察の覆面パトカーがずっと貼りついている。いくら自分を守ってくれているとはいえ、監視され続けているため心中は穏やかではない。それにあのような犯人に警察がかなうのだろうか、という疑問もある。あれと渡り合えるのは同じ神眼所持者の朱鳥位なのではないだろうか。

そんなことを寝起きの布団の上で考えていると枕元の携帯がなる。画面には“武神朱鳥”的文字が。無視するとやっかいなので（出るまで何度もかかるてくる）緑色の通話ボタンを押す。

「珍しく一回で出たわね。」

相手は心の底から驚いているようだ。いい加減俺も学習するに決まっている。

「で、何の用事だ？」

「気だるそうな声を出しながら答える。

「これからお邪魔して良い？」

「嫌だ」

間髪いれずに答える。「こいつは何を言っているのだろうか。惰眠

をむさぼりたいのにその邪魔をするとは何といつやつだ。

「俺は寝たいんだ。じゃあな。」

「んー・・・、もつついちやつているんだよね。」

「じゃあそのまま回れ右して帰れ。」

普通出かける前に連絡するのがマナーだろつ。

「それは面倒くさいわよ。早く開けてくれなきゃ護身用に持つてきましたこれで切り開けようかな。」

力チャヤ力チャヤと金属音の鳴る音が電話越しに聞こえる。

「待て・・・お前まさか真剣もつてきたのか・・・?」

「そうよ。だつてあの犯人ナイフ持つてるんでしょ? だつたらこちらもそれに見合ひうものを持つて来なきゃ。よし、行くわよー。」

「わかつた、わかつた。頼むからその物騒なものてしまえ。」

警察は一体何をやつているのだろうか。自宅の前に真剣を構えている人物のだ。どこからどう見ても不審者なのだから取り押さえるなりするのが当たり前だというのに。職務怠慢とは日本警察も困ったものだ。

仕方なしに布団から起き上がり階段を下りていぐ。玄関に向かい鍵をガチャリと開ける。そこには晴れやかな笑顔で真剣を片手に持つ少女がいた。

「お前、何の用だよ・・・。」

「ちょっと話があつてね。しかしあんた気を付けなさいよ。家の前に不審な車があるつていうのにどうして警察呼ばないの。怪しいから取り敢えず気絶させといたよ。」

朱鳥の後ろをみると不審車両・・・ではなく覆面パトカーの前に三人の男が倒れていた。どうやら俺を守つてくれている警察を不審者と間違えたらしい。

「馬鹿か。あが俺を守つてくれている警察だよ。」

えつ、と呴きゅつくりと後ろを振り返る。背後からもわかるほど動搖しているようだ。倒れた三人組を確認し再びゅつくりと此方を向く。その顔には冷や汗が浮かんでいた。

「エエエエエエエ。」

下がつまく回らないうつだ。

「いや、どうしようとか言われてもなー・・・。」

此方も起にして事情をわざわざ説明するのは億劫である。

「ほつとけば良いんじゃない? 後で勝手に目覚めるだらう。」

「大丈夫かな・・・。良かつた殺さなくて。」

ほつと胸をなでおろす。どうやら彼らは運が良かつたようだ。しかし、朱鳥にもかなわないようではあの犯人を止めることができに近いかもしれない。警察は期待できなさそうだ。

「んじやあの人たちが眼を覚ます前に・・・。」

そのまま早足で家に上がってきた。

リビングに入り刀を脇において着席する。俺は麦茶を冷蔵庫から取り出し机の上に持つていく。

「さて、さつきと同じ質問になるけれど何の用だ?」

こんな朝っぱらから来るのだから何か重要な用事でもあるのだろう。

「翔也は、犯人が気にならないわけ? というか、復讐したいとか思わないわけ?」

いきなり表情が真剣になる。

確かに犯人は気になる。しかし、先日の戦闘を思い起こす限りこちらに勝機は一切なかつた。寧ろ一方的におもちゃにされるだけであつた。

「そんなことは思わないよ。あいつに俺がかなうとは思えない。」

「そりゃあんた一人だつたらね。」

えーと、こいつは何を言う気なのだろうか。嫌な予感しかしない。それを口にする前に朱鳥の口が先に開いてしまう。

「私はね、あの犯人が許せない。絶対に許せないし許さない。翔也のあの姿を見たら余計にな。あいつを燃やしつくて黒い炭にして白い灰にしてやる。」

刀をきつく握り締める。眼は普段と違ひ朱くなっていた。よほど

頭にきているようだ。

「待て待て。ここで能力を使うな。家を炭にされたらたまたまんじゃない。」

あ、ごめんと眼の色を変える。快眠できる住処をなくすことは避けられたようだ。

だが肝心の問題が解決していない。このまま放つておいたら犯人探しが始まるだろう。あまりこちらからは行動を起こしたくないのだ。遭遇して何日か経つが犯人側からのコンタクトは一切ない。このまま動かないのが得策だろう。

「なー、そこまで俺を心配してくれるのはありがたい。でもなさつきも言つたが俺ではかなわないんだから動いても意味がないんだよ。」

「大丈夫、私も一緒に行くから。」

やつぱりこうなるか。

「んじやお前が一人でやれよ。」

「何言つてるの。犯人の姿を見ているのはあんたしかいないんだから勿論ついてきてもらうわよ。殺されそうになつても私が守るから。」

確かに朱鳥なら勝てるかもしねれない。

「いや、でもな・・・」

「ダン！」と俺の脇に刀が振り下ろされる。鞘に納められていたので机が真つ二つになることはなかつた。が、俺を脅迫するには申し分なかつた。

「行くわよね？」

「はい・・・。」

この状況にとても納得できなかつたがここは頷かざるを得ないだろう。ここで反論すれば机が四本足で立つていられる保証がなさそうだ。

「んじや、これから現場に行くわよ。案内して。」

刀を手に取り立ちあがる。その後をついて行き玄関を出ていく。

警察官はまだ倒れていた。その脇を通り現場となつたビルへ向かう。ビルに到着すると解体中だつたはずなのに、その外見は以前と変わつていなかつた。恐らく警察によつて解体工事を一時中断せられたのだろう。それを物語るかのように黄色いテープが入口に貼られていた。

朱鳥はそれを無視していくぐりぬけ中に入つていく。俺もそれに続く。

昼間とあり中は以前と比べてとても明るかつた。壁はコンクリートむき出しになつており無機質な空間だつた。相変わらず埃っぽい。朱鳥が動かないエレベーターへと向かう。

「おい、それ動かないよ。」

「え、そうなの。工事中だから当たり前か。そいつえれば何階?」記憶を探つていぐ。あれは確か・・・

「十階だつたかな。」

「十階ね。んじゃ登るわよ。」

早足でエレベーター横の階段に向かつていぐ。階段に足を置くたびに埃が立ちあがる。幾つかの踊り場には工具がそのまま置かれていた。無言のまま登り続け十階に到着した。

「うわー、これは酷いな。」

思わず声を上げる。表面が剥がれている壁。砕けている柱。あちこちにはナイフの残した跡が沢山残つていた。前は月明かりのみだったので部屋の様子がよく見えなかつたがここまで酷いとは・・・。良く生き残れたな俺・・・

ふと地面をみると人型に描かれたチョークのマークがあつた。

「そこに倒れたのね。」

そこには血の跡がまだ残つていた。その範囲はとても広く上半身を覆えるほどだつた。これだけ血液を流しているにも関わらず、本当によく生き残れたものだ。

朱鳥はすつと部屋の中を歩き回つてゐる。時々立ち止まり間隔を研ぎ澄ましているようだ。その目は朱くなつていた。

「おかしい・・・。神眼を使った形跡が残つてない。」

「そりやもう相当日にちが経過しているから残つているもの何てないだろうよ。」

首を横に振り否定する。

「神眼の力は使うと空間にその跡が必ず残るの。啓祐さんの話によれば言靈使いだった可能性はあるのよね。もしそれが本当ならば、その言靈使いは相当な力を持つている事になる。」

ん、こいつはいつ兄さんと会つたんだ?

「お前兄さんと会つたのか?」

「会つてはいなけれど今日の朝早くに連絡を入れたの。もう翔也から情報を聞いていると思つてね。」

勘の鋭い奴だ。

「で、さつきの話はどういうことだ?」

「言靈使いは現象に干渉することができるの。だから空間に残った後を消すことができるのよ。ただこれは相当な力がないと無理。それこそ人を殺せるようなレベルの所持者ね。」

「死ね”って言えば人を殺せるのか?」

「それは流石に無理、死に方を指定しないと。例えば心臓を止めるとかね。人間の肉体には常に動き続けなければならぬものがある。だからそれに干渉して止める。でも生命活動に関わる部分に干渉するのは非常に難しいのよ。理由はわかっていないけど。そして空間に干渉するのはそれすらも超えている。もし犯人が言靈使いならば私も干渉するのも超えていた。でもかなわないかもしれない・・・。」

「どうやら状況はあまり好ましくないようだ。  
でも、犯人が言靈使いとは限らないからね。この眼で確認するまでは。」

この様子からして犯人探しをあきらめる気は全くない。

「お前、確認してからで間に合つのかよ・・・。」

俺の言葉を氣にも留めず現場を調べ続ける。ナイフの跡に触れたりして微かにでもその跡が残つていなか調べているようだ。

「んじゃ他の殺害現場にも行くわよ。」

「おい、まだ探すのかよ。といつか他の殺害現場つてどうこうことだ？」

「啓祐さんに情報をもらつといたの。全部で後五件ね。」

「五件もあるのか・・・。俺のを含めると計六件。随分度派手にやつているようだ。」

「犯人の狙いは何なんだろうな。」

「眼をくり抜いているって話だから他の神眼狙いかもしないわね。」

「おい、だったらお前が一番危ないじゃないか。」

「コイツは正気なのだろうか？自分が一番狙われているのに何でこんな悠長に犯人探しをしているのだろう。」

「いや、悪魔で予測。殺された人たち全員所持者ではないしね。そんな話も聞いていない。」

「そうなのか。でも仮に犯人の目的が神眼だとしたら手に入れてどうするんだ？何かに使えるのか？」

「それは私にもわからない。わかつていれば神眼狙いだつて断定できるけれど、わからないから悪魔で予測なの。」

「どうやら本当にわからないようだ。しかし、理由が分からずとも眼をくり抜いている点からしてその予測は的外れではないのだろうう。」

「さて、さつあと行くわよ。幾つか気になる点もあつたし。」

「気になる点？」

「ちょっとね。他の現場を見ないことには判断できないから。」

「そう言いながら足早にエレベータ横の階段に向かっていく。俺もその後に続く。」

殺害現場は残り五件。

向かつたのは一回目の殺害現場。場所は路地裏のようだ。そこに入り口には遺族が置いたのだろうか、献花している花束があった。その花束の横を通り過ぎ黄色いテープをくぐり入っていく。しばらく細い道が続く。昼間なのにもかかわらずそこは暗かつた。

暫く歩き続けると少し広い場所に出た。周囲にはビルの室外機が幾つか置いてあり大きな音を鳴らしている。そしてここにもチョークで人型の絵が描かれていた。その色は薄くなつており殆ど読み取ることができなくなつていた。しかし、その周囲にある血のしみでどこで亡くなつたのかが直ぐにわかつた。

コンクリートについた血はどうやら取れていなかつたようだ。場所が場所なだけに洗い流す雨も届かないのかもしれない。

その小さな空間に佇み感覚を研ぎ澄ましている朱鳥。犯人の残した痕跡を探しているようだ。しかし、この現場は事件が起きて数週間は時間が経つてしまつていて。残る物も残つてはいなうだろう。「あのさ、数週間も経つてているのに何で探しているんだ?」「空間の傷は消えないわよ。時間なんて関係ない。」

姿勢を変えずに答える。

「それに、今僅かに残つてている痕跡だけでも探そうとしてるから声かけないで。」

真剣そのものな声色に俺は無言で答える。どうやら暫くそつとしておいた方が良さそうだ。しかし、こんな狭い所まで追いつめられて死しか選択肢がなかつた被害者。

どんなに苦痛だつたんだろうか。  
どんなに悲痛だつたんだろうか。

そういうえば、被害者がどんな人だつたのかを知らなかつた。男だつたんだろうか、女だつたのだろうか。子どもだつたのだろうか、

大人だったのだろうか。今の自分にそれを知る術はない。嫌、兄さんには聞けばわかるかもしれない。でもあまり意味はないだろうし、現場にのばす足がおもくなるだろうな。

朱鳥動き出す。どうやら、ここでやることは終つたらしい。

「ここにも、残つていたわ。」

「何が？」

「能力以外の力を使つた痕跡よ。」

「能力以外？」

「具体的に何かはわからない。でも能力以外の何かを使つた痕跡はある、というより違和感があるの。あの解体ビルにも空間に違和感はあつたの。ただ能力を使つたにできるものとは全然違う。似ているけど違うの。」

「なんだそりや。益々わからないな。」

「神眼以外に能力があるのだろうか。聞いたこともないが。いや、そもそも俺自身神眼のような規格外の力については詳しくないからもしかしたらあるのかもしれない。」

「神眼以外の能力の種類つて存在するのか？」

「それはない、と断言できるわ。そもそも神眼の能力と言つのは、特殊な身体を持つている人が發揮できる力を指すの。私たち神眼を持つ能力者は、人間がもともと持つているある力を他のものに変えられる身体なのよ。身体の構造自体が普通の人とは違うの。」

「ふーん。んじやもしその変えられる力があれば誰でも能力者になれるのか。」

「そうね。もつとも、変えられるシステムを持つてるのは今のところ身体だけだから無理だけど。」

「んじや、さつきから空間にある違和感で言つのは何なんだ？」

「それは知らないし、私が一番知りたいわよ。さて、この現場にはもう用がないから次行くわよ。」

そのまま、再び細い道に入っていく。

あの犯人の正体は何なのだろうか。性別すらわからない。眼を必

づくり抜く。一体何に使うのだろうか。身体の一部をわざわざ抉り持つて帰るというのは何か目的があるはずだ。ただの人の目の使い道・・・。そんなのあるのだろうか？

あれこれ考えていくうちに大通りに出た。まだ太陽は真上まで登つていない。

「次の現場はどこなんだ？」

「ちょっと待って。」

そう言いポケットから携帯を取り出す。

「次の現場はこつから歩いて十分くらいね。アパートみたい。」

「アパート？」

アパートと言うと部屋の中なのだろうか？ そうなると鍵が必要になつてくる。あ、でも朱鳥の刀でなら切れるのかもしねいな。器物損壊罪は免れないだろうが。

もつとも、こんな心配はまったくいらなかつた。何故かとすると、ドアがあつたであろう場所には黄色いテープしかなかつたからだ。ドアは一体何処へ・・・。犯人のあのワイヤーでバラされてしまつたのだろうか。

アパートの外見は水色。築20年位だろうか。所々錆びており年月を思わせるたたずまいだ。

それにして、人気がなく物静かだ。誰も住んでいないのだろうか？

郵便ポストを見るとほとんどがガムテープで塞がれていた。どうやら人はほとんど住んでいないようだ。

「全然人が住んでみたいだな。」

「そりや、町を騒がせている犯人が現れた場所にそつ長くは住みたいとは思わないわよ。しかも無差別だからね。」

確かに自分の隣の部屋で、町を騒がせる殺人事件が起きたら引っ越したくなるだろう。下手すれば被害者の最後の悲鳴を聞いているのかもしれない。そうなれば夜も寝ていられない。引っ越しして当然だ。

問題の現場はアパート一階の一番左の部屋だった。ポストを見た限り一階につき四部屋。そして事件の起きた部屋は104号室だった。

「四ねえ・・・不吉な数字として忌み嫌われていたから大分昔はなかつたみたいだけど、やつぱりこういのつてあるのね。」

「ドアのない部屋へと向かっていく。黄色いテープは潜り中に入る。」

「うわ・・・これは酷い。」

思わず口から言葉が漏れた。

部屋の中は悲惨な状況だつた。あらゆるものが破壊されテレビも真つ二つになつていた。家具もバラバラにされていた。その切り口は綺麗に一直線。そして、床は赤黒かつた。

「随分と派手に荒れてるわね。一体全体どうしたらこんなことになるのかしら。」

そして部屋の中央へと足を進める朱鳥。再び直立の状態で感覚を研ぎ澄まし探索を始める。

俺は、何か残つていいか他の部屋に行つてみる。といつても他の部屋は風呂場とトイレくらいしかないが。覗いてみると、綺麗だつた。何も壊れていない。そのままの状態だつた。

色々探してみるが犯人に繋がりそうなものはなかつた。最も、あつたとしても警察があらかた回収してしまつているだろう。

「何やつているの、そろそろ次に行くわよ。」

「ん、ああもう終わつたのか。」

「ええ、やつぱりここにもあつた。何かしらの力を使つた痕跡がね。どうやら言霊使いではなさそうよ。」

「そう言ってドアのない玄関へ向かう。」

「他に住人が住んでいたら話を聞けたのにな。」

「そうね。でも、その人たちの引っ越し先を調べるのも大変よ。わかつたとしても事件について聞くのは気がひけるわ。わざわざ引っ越しまでしているんだから。」

確かに、引っ越したという事は事件のことを忘れないのだからそ

れを今になつて掘り返させるのは酷なのかもしれない。

「そして次の現場はどこなんだ？」

「駅のトイレよ。因みに女子トイレ。」

ふむ、次の現場ではどうやら出番はなもそつだ。流石に女子トイレに入るわけにはいかないからな。

再び大通りを歩きながら今度は駅へと向かつ。アパートからはそう遠くないはずだ。

しかし、このような休日に俺が刑事のような行動をするのは我ながら可笑しい。寝るのが仕事である俺がだ、朝から歩き回っているのだ。雨でも降りそうだな。空は青空だが。もっともこの原因はあのフードを被った犯人としか考えようはない。あのように殺されなければ、変わらないものも変わるだろ。俺もこれから変わっていくのだろうか。急け癖は治ることは良いことだ。

無論、理由が理由であるのであまり歓迎はできないが。

「珍しく考えているような顔をしているわね。」

「いや、まーな。」

本当にどうしたのだろうか、俺は。

「なんでもない。所でお前疲れていないのか？」「.

「これくらい大丈夫。能力使うよりは全然楽よ。」

「なら良いけど。」

そんなこんなで駅が見えてきた。休日とあって人で賑わっていた。駅周辺には様々なビルが立ち並んでおり、遊びに来る人が多いのだろう。俺は出不精なのであまり来たことはない。

そしてトイレに到着。

流石に黄色いテープはなかつた。公共の場所なだけに綺麗にされているようだ。日頃から使つているわけだしな。

「んじやそこで待つてて。ちょっと行つてくる。」

そう言つて中に入つていった。俺は入り口で暫く休憩のようだ。時計を見ると十一時。このまま行けば昼過ぎには全て回れそうだ。

事件の現場は後一件。

「ん？」

ふと人の視線を感じたような気がした。顔を上げて探してみると人の数が多くて見つけることができない。

まさか犯人だろうか？でもこんな人の多いところでは流石に殺しかかれないだろう。

ヒュツ

眼の視界に不自然なもの、正確には左側に銀色に光る物・・・ナイフが顔の横の壁に突き刺さっていた。体中から冷や汗が出る。まだ犯人に狙われているのだろうか。殺されるのだろうか。恐怖が頭を食いつぶしていく。

冷静になれ。冷静になれ。冷静になれ。冷静であれ！

頭に意識が戻っていく。

ここでは殺されない、殺せない。

理屈で頭を落ちつかせていく。

落ちついたところで飛んできたナイフの柄を掴みナイフを抜く。刃の長さはそこまで大きくない。意外と小ぶりだった。

「どうしたの翔也？」

思わず驚いてナイフをポケットにしまう。小ぶりなので自然とポケットの中に入った。

「いや、なんでもない。」

「何か顏色が悪いけど・・・」

「心配しなくて良いから。」

「休憩しようか？」

「いや、現場も後二か所だろ。さっさと済ませよう。次はどこだ？」

「そう・・・。次は電車で三十分くらい先の郊外よ。お金はある？」

「大丈夫、財布はあるから。んじゃ行きましょう。」

人込みの中に入つていき改札へと向かう。

さつきのナイフ。犯人は俺の命を狙っているのは確実だ。ただ朱鳥のいない場所で攻撃を仕掛けてきたという事は、朱鳥がいれば早く手を出しては来ないと云う事なのだろう。

電車に揺られながら三十分、郊外へと到着する。周りにビルは無く人も少ない。ちょっと離れただけなのに、町の景色はこんなに変わるのか。

「四件目は神社の境内の中よ。ほら、あそこにあるでしょ。」駅から出て道路を挟んだ所に神社があつた。森に囲まれた中にいるようだ。周りは木々で溢れかえっていた。

鳥居を潜つて境内へ入り石畳を歩き進んでいく。奥に着く前に朱鳥が立ち止まる。

「こここの草むらの奥よ。」

そういうて、石畳からそれで草むらの中に入つていく。十五mほど進んで少し開けたところに出る。周りは黄色いテープで囲まれている。

朱鳥は再びその中心へ行き感覚を研ぎ澄ます。

俺は草むらの中に入り何かないか探す。無論、今までと同じく何も見つかるような気がしない。

「翔也、次行くわよ。」

「え、もうか？ 今回は早いな。」

「確定したのよ。犯人は、道具を使つていてる。言霊使いではない。そして道具は力を原動力としている。」

「人間だれもがもつっているやつか？」

「そう、つまり犯人は能力者とは限らない。といつても神眼能力者である可能性は高いのよ。私たちは力を変換する方法を生まれつき知つていてる。身体そのものが変換できる機能を有しているからね。その身体を有していないのに力を変換する方法を身につけるのは相当の鍛錬が必要。」

「成る程。」

「でも能力を使つた形跡がないから、もしかしたら能力者じゃないかも。でも能力者である可能性が高い。」

「おい、何かややこしいぞ。」

「要点は能力者だった場合、何の能力かさっぱりといふこと。これ

は戦闘となつた時に不便になるわ。」

「手の内がわからないのか。それは確かに厄介だ。」

「取り敢えず戦いになつたら先に道具を潰しにかかつた方が正解ね。」

朱い眼のまま真剣な表情の朱鳥。

「次の現場に行くのか?」

「こつから近いしついでに。」

そういうて草むらの中に入り石畳に向かつていつた。  
時刻はもう直ぐで十二時になろうとしていた。

五件目の現場は山の奥だ。さつきの神社の森の裏手にある山だ。距離的には眼と鼻の先なので直ぐに登山道に入つて目的地を目指す。手入れの行きどどいしている山のようで登山道もしつかりしておりやすかつた。

ところで朱鳥の様子が先程からおかしい。というのも、ずっと朱い眼の状態なのだ。臨戦態勢で刀に手をかけた状態だ。

「朱鳥さつきからどうしたんだ?」

「ん、気にしないで。」

ふむ、気にしないでと言われてもその状態では気にしないのが無理な話なのが。

「近くに犯人でもいるのか?」

「大丈夫。見つけ次第この山ごと火葬するから。」

いやいや。そんなことをされてしまつたら俺まで葬られてしまいそうな気がする。

どうやら犯人 フードを被つたワイヤーとナイフの使い手 はここにいるようだ。さつき俺にコンタクトを仕掛けてきたことを考えれば、近くにいるのは当たり前なのだろう。

そういえば先程のことを朱鳥に言いだせなくなつてゐる。タイミングを逃してしまつた。優柔不断が故の癖である。正直臨戦態勢の朱鳥にこれ以上警戒心を与えてもどうしようも無いので、ほつておくことにする。

暫く山道を登り続けると、倒れた木によつて道がふさがっていた。それも一本ではなく何本もの木によつて塞がれていた。切り口はとても綺麗だつた。

「ここが最後の現場よ。」

「成る程・・・あのワイヤーって木も切れるんだな。逆にあの女人がバラバラにならなかつたのが不思議だ。」

「ワイヤーの切れ味は力の調整で変えられるのかもね。」

刀に手をかけたまま立ち止まる。周囲を警戒しているようだ。心なしか周囲の気温が上がっているような気がしてきた。朱鳥の警戒心が限界まで引き上げられている。間違いない近くに犯人はいるのだろう。

「いい加減出たらどうなの？」

朱鳥は視線を周囲に走らせながら声をかける。

「やー やー、朱いお嬢さん。そんなに殺意を出さなくて良いよ。その燃えるような闘志でこの山が燃えちゃうじゃないか。」

上から軽い声が聞こえてくる。それと同時に朱鳥は刀を抜きそちらの方向へ身体の向きを変える。

「ようこそ、俺のファーリードへ。」

手を広げながら今にも倒れそうな木の上にそいつはいた。あの夜と同じ格好。しかし、明かりの中とあって良くその様子が分かつた。鼠色のフードに半ズボン。服にはいくつもの切りこみが入っている。そこからナイフの出し入れしているようだ。あの夜、身体の中に入っていると思っていたのはその切り口が見えなかつた錯覚のようだ。そして両手にはナイフを構えている。表情はフードを被っているためわからない。依然と同じく口元は酷く歪んでいた。

背の大きさはそこまで大きくない。中肉中背という四字熟語がピッタリだ。

「お前・・・！」

「久しぶり。まだ覚醒はしていないのかな？ だつたらちょっと刺激が必要かもね。」

ナイフをクルクル回しながら刃先を俺に向ける。

「黙れ！ 翔也に手は出させない！ 覚醒もさせない！」

低い声で犯人に刀を向ける。その刀からは火の粉が出ている。

覚醒？ 一体何のことだ？ 俺には何の覚えもない。しかし朱鳥は知っているようだ。まさか俺に隠していることがあるのだろうか？

「おーっと、そんなに慌てるなよ。」

両手で朱鳥を制しながら、お気楽な声で話し続ける。

「さすが正統な血の流れを汲んでいるだけあって、能力の質は中々良いね。あこがれちゃうな。」

相手の話しが朱鳥と真反対、相反してゐる。ここにもやはり何らかの能力を所持しているのだろう。出なければここまで余裕を出せるわけがない。朱鳥は武神の血を引き、強力な朱の力を持ち、強い。そんなのは一笑に付すものに過ぎないという素振りだ。

「そこの、翔也だつけ？彼も中々だけど今現在では君の方が価値はあるね。その眼欲しいかも。」

俺に向けていた刃先を朱鳥に向ける。

「私の眼を奪いたいなら奪つてみな。その前にあんたに聞きたい。何故、普通の人眼を取つてゐる。私のような神眼所持者の眼ならいざ知らず、普通の眼を殺してまで取るような価値なんてないはず。」

「その質問には答えて上げよう。答えたらいその眼を抉り取つても良いのかな？」

「タダでもお前には渡さない。」

「タダより高いものはないのになー。ま、良いや。んじゃ俺様は親切だからその質問には答えて上げよう。出血大サービスだよ。」

そう言いながら、風通しのよさそうな服にナイフをしまう。

「武器をしまつてもまつたく警戒を緩めないんだね、朱いお嬢さん。」

「当たり前でしょ。あんたの武器はワイヤーとナイフでセツトなんだから。そしてワイヤーは見えにくい、特にあんたのはね。今も見えているのはあんたの周辺にあるやつのみ。そのワイヤーがいつ襲つてくるのかもわからないのに、警戒を緩めることはしない。」

「『』明察。ワイヤーは巻くのが面倒くさいんでね。そのままにしておく吧。さて、では最初の本題に入ろうか。俺は戦う事も好きだけ喋ることも好きなんだ。まだ時間はたっぷりあるんだ。ゆっくりいこうじやないか。」

こいつ、ペースを全く乱さない。マイペースの代表と言えるかもしれない。このままでは朱鳥があいつのペースに飲み込まれる可能性が。

「おい、早く話を済ませろ。そもそも、俺はお前と喋りたいとは思わない。」

こいつのペースに乗つてはいけないと考え抗うが・・・

「おやおや、随分と俺も嫌われているな。」

やれやれと両手を上げる。抗つても受け流されてしまう。抵抗しても無駄なようだ。

そして、話を続ける。

「翔也、だっけか。お前にとつて眼とはなんだ？」

眼、身体の一部、外の世界を認識するにとても優れている身体の器官

「その通り。そして眼と言うのは聴覚よりも沢山の情報を取り入れている。パソコンだと音楽ファイルより動画ファイルの方が要領は大きくなる。それほど、視覚の情報量はとても多いんだよ。その眼をだ、俺は自分の能力の質を上げるために使っている。ただこれは相性があつてだな、例えば朱いお嬢さんの眼の力はとても素晴らしいが実は俺とは相性が良くないがためにあまり意味をなさないんだな。さっきのはコレクションとして欲しいという事なのさ。だから一般人の眼を使う。一般人の眼は相手を選ばないからな。」  
「つまりあんたは自分の能力の質を上げるために人を殺して眼を奪つていたわけ？」

刀を構えたまま問いかける。

「ご明察。おかげで俺の能力は格段に上がったね。」

「でも、他人の眼を取り入れて能力が上がるなんて初耳よ。」

「ふん、それはこの国の研究が遅れているだけさ。全く何の研究もされてないんだな。呆れたよ。」

首を振りながら心底呆れている。そもそも日本では神眼の能力を知っている人は少ない。というのも殆ど認知されていないのだ。そ

のせいで研究も進んではないのだらう。何故なのだらうか？神眼の能力はどう考へても大衆の眼を引くはずなのに。

「全く、」この国は本当に閉鎖的だな。内緒ごとが好きなんだらうな。

「それに対し睨み続けることしかしない朱鳥。研究が進んでいないのは事実なのだらうか？」

「無言か。最もその無言は肯定として受けとつておくよ。それにしてもその刀、中々優秀な神器じゃないか。引きこもりの国が作った物にしては良いものだ。」

「神器・・・？」

疑問を浮かべる朱鳥。初耳らしい。

「神器という名前もしらないのか。そいつも俺のワイヤーと同じお前の力で強化されている。最もお前の場合は身体の延長線上のよつなもので、俺のワイヤーとは若干異なるみたいだがな。神器と言うのは人間に本来備わっている力を用いて、力を発揮させる道具全てを指す。そして発揮できる力は所持者の能力の質の良さと比例する。普通のやつらの眼を喰つた理由もその一つだ。」

「あんた、それが許されるとでも思つてないわよね？」

今にも切りかかりそうな勢いの朱鳥。見ている此方は不安で仕方がない。

「許される、か。俺は誰にも許されるつもりなどない。後悔もない。止める気もまだない。そして朱いお嬢さん、俺はその男の眼が一番欲しいんだ。といつても今はまだその時ではないけれど。」

「おい、今じやないつてどういうことだ。さつきの覚醒と関係あるのか？」

最初のこの二人が話していた「覚醒」の話。俺には自分に関する知らない何かがあるのだろうか。

「あれ、これは予想外。本人は気付いてないのか。蒼き能りよ・・・

「黙れ！――」

朱鳥が叫ぶ。あいつの声を書き消すかのよつ。

「おい、朱鳥どういうことだ？」

「ここまできて何故隠そつとする。俺のことなのにそれを知る権利はないのか。

「じめん。まだ、その時じゃないの。説明できる時が来たら説明する・・・」

「やるせない声で話す。やはり何かがあつよつだ。  
だとしたらそれは怖い。

非常に恐い。

そんなの恐怖でしかない。

「ふん、そういうことか。そいつの力は確かに珍しいからな。お前らの道具にでもするつもりなのか？」

「そんなのはさせない。神の家の頭領、武神の次期頭首としてそれは許さない。」

「次期頭首だろ。現頭首の意思には逆らえないんじやないかな。」

「黙れ！――！」

「都合が悪くなればその一言で済ます気か。はん、つまらない。」  
頭をかきながら呟く。

「おい、そこのボーッと立ちっぱなしのお前。」

「何だ。」

「もし覚醒について知りたければこいつを倒すのに協力しろ。そうすれば教えてやっても良いが。」

「ふざけるな。」

いくら知りたいと言つても朱鳥を裏切るつもりはない。そんなのは全く別の問題だ。同列に並べる物ではないし、条件にもならない。「殊勝なことで。もつとも、覚醒していないお前など何の役にも立たなそうだがな。」

確かに、神眼所持者同士の戦いに普通の俺が介入する余地がないのかもしない。

「まー、そながつかりするな。近い将来お前も俺たちの舞台の上で

一緒に踊れるようになるさ。」

「貴様、いい加減にしろ。」

朱鳥がもう限界のようだ。刀が朱く光り始めている。

「そろそろ良い時間か。俺のステージの上でどれだけ戦えるのかな。純血な神眼所持者との戦いはそう出来るもんじゃない。せいぜい楽しませてくれよ。」

「翔也、下がつて！」

いきなり朱鳥に後方へ突き飛ばされる。山道を数m転げ落ちる。いつの間にか眼の前に大量のワイヤーが張り巡らされていた。まるで大量の蜘蛛の巣だ。それが俺と朱鳥の間を阻む。

「流石は勘が良いな。さて殺し合いを始めようじゃないか。」

手を広げ酷く歪んだ口で高らかに開戦を告げた。

一瞬、時が止まった。

俺は何もすることは出来ない。今はただの傍観者でしかいられない。介入は許されない。というより、介入したら直ぐに巻き込まれて死ぬだろう。直感でわかる。

「そうだな、まずは名前でも名乗つておこうか。」

そいつは酷く歪んだ口元を動かす。

「俺の名を知らずに死なれるのは味気ないからな。」

止まつた時の中で言葉を続ける。

「無の世界へと俺の名を運べ。俺の名を無の世界へ広める。朱い女。

動き出そうとしている時の中でも言葉を続ける。

「俺の名前は式神厭人。しきがみあきと今は失われた神の名だ。」

武神と式神が動き出す。

朱鳥の刀が朱く燃え上がる。

『我が獄炎よ、我が指示に従い使命を果たせ。』

朱鳥を中心に爆発が起きる。周囲にあつた木、草、土、全てが炎をまとつて式神に向け吹き飛ぶ。

『Fire go!』

ワイヤーが青白く強い光を放つ。すると足元にあつたワイヤーが式神を空中へ打ち上げた。その下を大量の破片が洪水のように通過していく。その跡は地面が抉れ、黒い煙を上げていた。

朱鳥は動作を止めず刀を下に構えて振り上げる。剣先から炎が喰らい突くかのように式神へ向かつ。式神は空中にもかかわらず全て回避する。そのまま地面へ着地し、前傾姿勢の状態で朱鳥へ向かい突っ込んでいく。その軌跡に沿つようにワイヤーが青白く弧を描く。

『fire!』

式神がそうつぶやくと服の切り口全てからナイフが飛び出た。青

白い軌跡を描きながら大小様々のナイフが無数の数で襲いかかる。

「よくそんなにナイフが入るわね。」

朱鳥も式神に向かい、刀で全てのナイフを弾く。一方式神は両手に四本ずつナイフを構える。

二人が衝突する。

金属と金属が激突する。

甲高い音を上げて相対する。

式神は殴るように右手で切りつける。朱鳥は刀で反らしながらその隙を突くように刀を振り上げる。式神は身体を捻るようにしながらそれを回避し、振りかえりざまに左手の四本を朱鳥の身体に向けて投げつける。朱鳥はそれを横に回避する。ナイフはそのまま地面に突き刺さり大きな音を立てて地面を割る。

二人は距離を取り姿勢を直す。

「流石武神だ。その血を引いているだけあって、身体能力は高いな。早く死んでくれないかな。」

「あんたこそまさか式神とはね。もう既に消滅した家系のはず。何で死んでいないのかしら？」

二人とも全く息が切れていない。何事も無かつたような素振りだ。

「ふん、俺様を生んだ家系がそう簡単に消えるわけないだろう?」

「じゃ、私がここでそれを断ち切つてあげる。あんた達は消えるべくして消えたはずの家系なんだから。生きていることは許されない。」

「消せるものなら消してみる。お前如きに殺される俺様ではない。消えるのはお前だ。そして、あの木の陰にいるやつの眼を頂こう。」「私の命に代えてもそれはさせない。」

朱鳥は刀を中段に構える。基本的な刀の構え方だ。その剣先を式神へ向ける。

一方、式神は右手にも持っていたナイフを地面に落とす。ナイフの刃は赤くなっている。刃先がボロボロになっていた。

「しかし、全く無駄に熱いな。こんなんじやどんなナイフも駄目だ

ろうな。」

そう言いながら、ズボンの後ろに手を伸ばしグローブを嵌める。そして、小刀を取りだした。大きさは肘から手首までなので、そこまでは大きくない。それを、逆手に持ち顔の前に構える。

「では、本気で行かせていただこう。」

「同じく、私も貴方を灰すら残らない状態にまで燃やしつくす。そんな小刀、ただの鉄の塊に返す。」

地面を碎くような音がしたかと思うと、朱鳥は一瞬で式神との距離を詰める。間は十メートルもあつたはずなのに一瞬で式神の眼と鼻の先まで迫つたのだ。刀を振り上げる。

式神は驚きもせず小刀の持ち手を変えてを受け止める。朱鳥も朱鳥だが式神も異常な反応速度だ。

再び切り合いが始まる。朱い炎を纏つた刀が綺麗な弧を描きながら式神へ襲いかかる。式神は身体を捻り踊るように避けながら、小刀で切り掛かる。無論それも朱鳥によって反らされて当たらない。段々と二人の速度が上がっていく。距離を離したかと思えば距離を詰め、切り捨てたと思えば反らされ、殺したと思へば生きている。止まることなくその戦いは激しさを増す。まわりの木や草は燃えて灰になり、土は黒く焼け焦げ砕かれている。あの二人の周辺にいたあらゆる生物はもう生きてはいないのだろう。それほど破壊されつくしている。

神眼と神眼がぶつかりあうと全てを壊してしまうのだろう。

「あれ、そういうれば式神の能力って何なんだ・・・?」

神眼所持者であることがわかつていて、しかし、その能力はまだ分かつていな。まだ使つてゐる所を見ていないので、眼に見えないタイプの能力なのか、それとも隠しているのか。能力を使わなくて使用している朱鳥とほぼ同等の強さ。能力を使つたら一体どうなるのだろうか。

青白く光るワイヤーの向こう側で行われてゐる人外の戦い。決着する気配はない。このままでは持久戦になるので、助けを呼

びに山を降りた方が良いかもしれない。朱鳥を置いて行くことになるが、俺は何もできないので同じことだわ。

ばれない様に姿勢を低くしながら山を下り、背を向ける。

「翔也！……」

「え？」

思わず間抜けな声が出てしまつ。振り向くと音は止んでおり、式神がいなかつた。

ヤバい！

いそいで周囲を探すが、いない。

その代わり、ワイヤーが空を切る音が周囲に響き渡る。

「どなつてい・・・」

言い終わらないうちに右腕を何かにきつて縛られた。

「え・・・」

右腕を動かそうとするが全く動く気配がない。青白いワイヤーが腕に巻かれていた。

そのまま、一気に残っていた木の枝に吊るし上げられる。一メートル程釣りあげられたようで地面が遠く見える。

右腕に激痛が走る。ワイヤーが食い込んでいるようだ。思わず顔が歪む。

「良い表情してるじやん。言つておくが俺はお前も逃がすつもりはないよ。ここでジッとしておいてくれ。あいつを殺すまでの辛抱だ、我慢してな。」

いつのまにか真上に式神がいた。

「翔也を離しなさい！」

「んじや死ね。」

式神は再びジャンプして荒廃した場所に着地する。

「はーっ！」

着陸後を狙つかのように式神へ突つ込んでいく朱鳥。それを受け止める式神。

炎を纏つた刀と小刀がぶつかり合つ。

『爆炎！……』

朱鳥がそう叫ぶと朱鳥の刀が爆発した。轟音と共に一人を炎が包み込む。

その炎の中からそれぞれ反対側に吹き飛ばされる。地面を転がりながら二人は立ちあがり態勢立て直す。

「朱鳥！お前馬鹿か！！」

「大丈夫よ。この私が自分の炎で死ぬわけないでしょ。」

俺の心配を余所に平然とした様子で返す。しかし、肩で息をしているほど息切れしており限界が近づいてきたようだ。一方の式神は、流石にダメージを受けたようだ。鼠色のフードは今真っ黒になつていた。

「ちつ、全く威力だけは高いなお前。」

そう言いながら犯人は上に着ていたパーカーを脱いだ。

髪の毛は白、右腕には大きな青色の刺青、そして眼は“蒼”かつた。眼は蒼いのにその内に秘めているものはとても暗かつた。外見は少年のようで体格は細く筋肉が付いている。

「言つておくが、俺はお前と同い年だからな。」

「え・・・あ、ああ。」

どうやら見透かされていたようだ。

「全く、外見だけで人を判断するなど愚者がすることだ。お前いつへん死んでみるか。あーでもその前に覚醒させて眼を頂いてからだな。」

燃えたのはパーカーのみで式神は無傷だった。

「あんたも、しぶといわね。」

「ふん、お前よくやるな。俺様をここまで追い込んだのはお前が初めてだ。まさか、あのパーカーを焼き切るとは。おかげで武器が小刀一本になつたじやないか。」

やれやれという表情で両手をヒラヒラさせる。

「んじや、ここで死んで楽になりな！」

地面を碎く音と共に朱鳥は式神との距離を詰める。

「お前がな。」

左手を上にあげる。ワイヤーが空を鳴らす音が周囲に響く。青白い線が様々な線を描く。

そして、朱鳥の動きが止まつた。

「な・・・。」

朱鳥の体中に青白く光るワイヤーが巻きついていた。

「どうやら此処までのようだな。」

小刀の腹で肩を叩きながら余裕の表情で話す式神。

「周囲を良く見ないからこうなるんだよ。覚えたかな？お得意の自爆ももう一回使えば流石に致命傷になるだろ？」

「馬鹿ね。爆発する必要はないわよ。」

「は？」

余裕の表情の朱鳥に、疑問を浮かべる式神。

そして同時に気付き小刀を朱鳥の心臓に向けて突きたすために突っ込む。

「遅いわよ。」

『炎よ、全ての糸を焼き切れ。』

周囲に張り巡らされている青白いワイヤーが赤く光初め次々と切れていいく。

俺の右腕も自由になり、下に尻もちをついて落ちる。

「痛え・・・。」

二メートルほど釣りあげられていたので思ったより痛かった。

朱鳥の方を見ると拘束が解けたようで式神の小刀を受け止めていた。

「チツ、しとめ損ねたか。」

「甘いわよ。私がそんなことじや死なないわよ。」

「ならば、俺の能力でお前を封じるまでだ。」

式神の蒼い眼が朱鳥の眼と合つ。

すると朱鳥は力が抜けたように倒れていぐ。

「あ、あんた・・・何をした・・・。」

刀を地面に突きながら膝をつく。

「朱鳥、大丈夫か！」

急いで朱鳥に駆け寄る。

「まだ、上手くいかないか。もう少し力が必要みたいだな。」

朱鳥から距離をとり薄笑いを浮かべる。

「お前、何をした！」

「なーに、ちょっと心を弄らせてもらつた。初めてだから中途半端みたいだがな。」

まんざらでもないといつようだ。

「心つて、どういうことだ！」「

「それはお楽しみだ。しかしちょと疲れたかな。俺はここいらで退散とさせていただこう。お前の眼は今度頂こうか。」

そう言つと荒廃している木々の向こう側に消えていった。今回はこれ以上追撃をしてこないようだ。

「朱鳥！大丈夫か！？」

段々と顔色が青白くなつていく。かなり重症のようだ。

「ごめん・・・歩けそうにないから家まで連れて行ってくれないかな・・・。」

息も切れ切れに言つ。

「大丈夫だ、俺がちゃんと連れて行くからもつしゃべるなー。」

「あり、がと・・う」

意識を失つたようだ。

早く朱鳥を連れていかなければ。

俺は朱鳥を背負いながら急いで山を降りた。

その後、急いで山を降りたて朱鳥の家へ電話をかける。一度救急車へ電話をしようとしたが押したがそれはやめた。朱鳥の異常の原因は神眼のせいなのであり、一般的の病院ではなんの解決にもならないと判断したからだ。そしてどうやら正解だったようだ。

「もしもし、武神です。」

抑揚のない一定のトーンの声だった。電話に出たのは朱鳥のお付きの人らしい。あらためて、朱鳥がお嬢様なことに今更ながら驚いてしまった。因みにお付きの人の名前は口式人せつ いしつと言うらしい。取り敢えず今起きたことについて場所や状況を一通り伝えた。

「わかりました。ではそちらに向かいますので、動かずそこでお待ちください。あ、病院に連絡するなどの余計なことはしないで下さい。色々と厄介ですので。」

朱鳥を近くにあつたベンチで寝かせる。俺は車が来ても直ぐわかるように車道の方を良く見る。

そうして数分後で黒い車が道の向こうから見えてきた。車の通りが殆どない道だったのでまさかとは思つたがそのままかだった。車は俺たちの前に止まる。しかし、電車で三十分以上もかかるこの場所へ何故こんなにも早く着いたのだろうか？異常な早さである。

中からは黒いスーツを着たオールバックで眼鏡をかけた男が降ってきた。年齢は啓祐兄さんと同じくらいのようだ。

「翔也さんですね。お嬢様を見ていただきありがとうございました。」

「そう言つてベンチに寝かせてある朱鳥の方へ向かう。当の朱鳥は顔が青白くなつており呼吸も荒くなつていた。氣も失つており非常に危険な状態だ。」

そんな朱鳥の様子に取り乱すことなく、無表情に脈を測つたり瞳孔を見たりしている。それらが済んだ後に朱鳥を抱き上げ車の後部

座席に運び込む。無駄のない迅速な動きだった。

「あなたも助手席に乗つて下さい。色々と話を聞かなければなりませんので。」そのまま、お嬢様のお宅まで来ていただきます。大丈夫ですか？」

「はい・・・大丈夫です。」

有無を言わさない物言いだつたので大人しく従う事にした。無論、断る理由も無いわけなのが。

車の助手席に座つたら直ぐに車は発進した。

「あの、質問を良いですか？」

実はわざわざから何故こんなに速く到着したのか気になつてゐるのだ。

「どうぞ。答えられる質問には答えましょう。」

「ありがとうございます。まず。何故こんなに速く到着したのですか？俺は朱鳥の自宅へ電話をしたはずです。電車で三十分もかかる場所から何故こんなに早く到着したのですか。」

「そのような事、少し考えればわかるのではないか。お嬢様の家庭教師を受けているのですから。」

「あ、はい・・・。」

うーむ、何故かとても攻撃的な印象を受けるのは何故だろうか・・・。

「もつともそのような質問をしている時点でダメなのですが。仕方がない、此処は答えて差し上げましょ。」

やはり一々棘ある言い方だ。

「単純です。私はお嬢様から今日ビビチラへ行かれるのを聞いていたからです。」

「近くまで来ていたんですか、成る程。いや、待つて下さい。それだと自宅の電話に出たことの説明にならないじゃないですか？」

「あなたは転送という言葉を知らないのですか？自宅の電話であつても、出た場所が自宅とは限らないでしょ。」

「あ、そういうことだつたんですか・・・。」

思わず声が小さくなつてしまつ。この人、表情が終始変わらないで何を考えているのか全く分からぬのだ。鉄仮面の人と話すのは苦手だ。一様、言葉の節からして怒つてはいるような氣はしないでもない。

「私が外出する時には常に転送の状態になつてゐるのです。何事も私を通してから連絡が行くようになつています。これは朱鳥のお父様である褚轡しづるさまも同じです。」

「朱鳥のお父さんとこうと、現在の武神家頭首ですかね？」

「そうです。」

「朱鳥の付き人なのに何故、頭首でもある朱鳥のお父さんの中でも管理しているのですか？」

「私は武神家全ての情報を管理しているのです。なので武神家に関する情報は私に全て集まるようになつています。」

「どうやら、かなり信用されているようだ。」

「因みに私には弟と妹がいましてね。一番目の弟の式良じしやうは護衛を担当しています。三番目の妹みやぞき？ 塑稀みやぞきは医療を担当しています。」

兄弟揃つて武神家に仕えているのか。しかし何故、弟や妹の情報までわざわざ俺に話したのだろうか？ それぞれの役割が、情報管理、護衛、医療と重要な役割ばかりだ。

「その質問に対する解答は明白です。あなたにはこれから暫くこちらで過ごして頂くことになるからです。その上で私たちについて知つておくことはとても重要です。」

「え、何ですか？」

「自宅に帰ることができなくなるという事なのか。これまたいきなりな展開だ。」

「理由なんて聞かないで下さいよ。事態はかなり深刻なのですから。」

「俺はとんでもないことに巻き込まれてゐるみたいだ。もつとも殺されかけたあの夜からなんとなく感じていたことだが。恐らくはあの式神のやつのせいだろう。それを踏まえると武神家は一番安全な

のかもしない。

本来消滅したはずの家系、神の名を持つ少年。あ、俺と同い年だ  
そうちから青年というのが正しいのだろうか。そして、“蒼い眼”  
“蒼い能力”。

しかし、俺は神眼に詳しくないので周りで起きていることに関しては理解が及んでない部分が沢山ある。その説明を是非して欲しいと思うのだが、そうはいかないようだ。俺に対する対応は非常に刺々しいからな・・・。武神家の情報管理をしているのだからきっと知っているのだろうけど、質問するのは何か気が引けるのだ。

そんな非常にいざらい雰囲気の中、車で三十分ほどだろうか。朱鳥の自宅に到着した。その門構えはとても立派である。さながら、武家屋敷だ。周囲は高い塀で囲われている。周りは山に囲まれておりとも東京にある場所とは思えない。建物自体は木造で大きな屋敷になつていて。敷地は勿論無駄に広い、迷子になる位広い。屋敷が入り組んでいるのでなおさらだ。昔遊びに来た時には、朱鳥が必ずいなければ迷子になること必須だった。

門が自動的に開き中に入していく。暫く車を進めると玄関に到着した。そこには、救急用の担架と白衣を着た人がいた。髪を後ろで束ねており体格は細くて背が高い。眼鏡をかけており見た目からして頭がよさそうだ。あれが？塑稀さんなのだろうか？性格は式人さんと同じようなのだろうか・・・。そうだとしら少し困るな。話してみないことにはわからないが。

?塑稀さんの目の前に車が静かにとまる。式人は急いで自動車を降りて後部座席で寝ている朱鳥を運び出す。担架に乗せた後に?塑稀さんと一緒に会話している。その間俺は朱鳥の横に立つて様子を伺う。さつきと比べると更に酷くなつているようだ。そこへ？塑稀さんが話しかけてきた。

「翔也くんかな？」

明るい声で話しかけてきた。どうやら兄である式人はさんとは違う性格のようだ。

「はい、やうです。はじめましてよろしくお願ひします。」

「よろしく。んじやさつとお嬢様を医務室に運ぶわね。あなたも怪我しているようだからついてきて。治療してあげる。」

そこへ才人さんが声をかけてきた。

「翔也くん。治療が終わり次第赭攀さまと会つていただきます。覚悟しておいて下さい。」

そう言つと、車に戻り発進させてどこかに行つてしまつた。

しかし、“覚悟”しておくとはどうことだらうか・・・。不穏な感じにしか聞こえない。

「んじや行きましょ。」

? 脊稀さんは早歩きで担架を押して移動を始めた。俺はその後について行く。

「お嬢様の容体は最悪であつても、死ぬことはないから安心しない。」

「そうなんですか?」

「ま、これは医者としての直觀だよ。信頼はして欲しいかな。本当のことは実際に治療してみなきやわからぬけどね。」

如何にも自信ありげの様子だった。武神家の医者だから恐るべ日本一信頼できるかもしれない。だから信頼しようと思つ。

「あ、そうそうさつきの才人のことだけ、大丈夫よそこまで心配しなくとも。赭攀さまはそこまで怖くないから安心しなよ。」

「そうなんですか・・・。」

「全く、才人は脅し過ぎだよ。怒つていいようだけど翔也くん関係ないのになー。」

「あ、やつぱり怒つているんですか?」

「うん。理不尽だよね~まったく。」

「あのー・・・、何で怒られているのかよくわからないのですが。」

「お嬢様が傷ついたことに怒つているのよ。そしてその原因が翔也くん絡みだからね。勿論、翔也くんの責任ではないよ。当たり前だけど。悪いのは式神のやつだからね。」

「式神について何か知っているんですか？」

「いや、私はそこまで詳しくはないよ。式人なら何か知っているのかもしれないけど。でも後で赭巻さんに会うのだから、そこで聞けば良い思うよ。そこら辺の話については日本の中で誰よりも詳しいはずだからね。」

確かに朱鳥のお父さんならば何でも知つていそうだ。勿論、俺に関することについても。

「しかし、いきなり最近忙しくなったわね。つい数ヶ月前はのんびりとした時間が流れていたのだけれど、暫くはこの緊迫した状態が続くのでしょうかね。」

真剣な眼になり考え込む？塑稀さん。暫くして医務室に到着した。その前に立ち止まりこちらに顔を向けてきた。

「んじや翔也くはちょっととここで待つて。朱鳥の治療するから。数分で終わるともうけど、その後に君を治療するね。序に検査もあるから。んじや、また後で。」

そう言つと医務室の中に朱鳥を運びこみ扉を閉じた。俺は近くの椅子に座りこみ待つ。

「やあ、君が翔也君かい？」

いきなり隣側から声がした。直ぐ右隣に、いつの間にか居たのだ。外見は式人さんと似ており髪型は同じオールバックだが、式人さんよりも長かった。何故か二コ二コしている。

「あの・・・、式戻さんですか？」

「おお！よくわかつたねー。凄い凄い。改めて、俺は式戻だ。この家の護衛を担当している。以後お見知りおきを。」

笑いながら握手を求めてきたのでそれに応じる。一コ一コと決して顔を崩すことはない。この人となら？塑稀と同じようにコヨニケーション出来るかも知れない。

「君も大変だったね。よりもよつて式神に眼を付けられるとは。ま、君なら大丈夫。なんとかなるさ。ところで式人が何かしなかつたかい？」

「いえ、特に何も・・・。」

「ほー、これはこれは明日にでも槍が降りそうだな。かなりあり得ないことだから。君、一生分の運を使い果たしたかもね。式人があたりしない何で珍しいぞ。」

「あ、いえハあたり位なら・・・。」

「そうかそうか。ま、当然と言えば当然。あいつは武神家の情報に詳し過ぎていてるからね。それは言いかえれば神眼に関する情報を殆ど知っていることになるんだよ。故に、あいつは全てが見えているような錯覚に陥っているのさ。だからこそ何とかなりそうだったけど、何ともならなかつたことにうんざりしてしまうのさ。それは既に何ともならなかつたことでも。今回の件然りね。俺よりも年上のくせにまだまだ子どもだよね。フフッ。そうそう、君は何かしらの能力を持つていらないのかい？式神に集中的に狙われるというのはとてもとても重要な意味を持っているんだよ。多分蒼の能力だね。ただ蒼の能力つてうちのお嬢様の朱と違つて様々な種類があるんだよね。だから君がどんな能力を持つていてるのかとても興味があるんだよ。」

前後撤回。この人、ほつといたらずつと喋つていそうな気がする。ある意味コミュニケーションが取りずらい。しかも、思い込みも激しいときた。もしや俺などいなくとも、壁さえあればずっと話せるんじやないだろうか。

もつとも、その光景を思い浮かべると何故か胸が痛くなる・・・。『残念ながらまだわからないです。その・・・蒼の能力であるかどうか』

「うかも。」

「そうかそうか。では後で赭攀さまにでも聞いておくと良いよ。あの方は君の事について昔から知つてているらしいからね。」

「そなんですか？」

これは初耳だつた。一様朱鳥とは幼馴染だから昔は良く遊びに来ていたのだが、実は朱鳥のお父さんとは殆ど会つたことがないのだ。

「フフツ、これで赭攀さまと会つのが楽しみになつたかな?どうせ

式人には“覚悟しておけ”みたいなことを言われたと思うけどそんなに緊張する必要はないよ。別に死ぬわけじゃないんだからさ。寧ろ君にとつて有益な情報になるのだから喜ばないと。ほら一ーッて。

「いつのまにか口の中に両手の人差し指を入れられて無理矢理笑顔を作らされていた・・・。

「二ーッ・・・。」

何やつてんだろ俺・・・

何で初対面の人に入差し指を突っ込まれて無理矢理笑わされるのだろうか。壁一つ向こう側では朱鳥が苦しんでいるというのに。「そうそう。笑顔は大切だよ。危機的状態にあればある程ね。死ぬときだって笑って死ななきやだめだよ。笑顔というのはとても高尚なものなんだからね。何せ人間にしかできな表情何だから。笑顔こそが人類があらゆる生物の頂点に立てた理由と言つても過言ではないと思うよ。だから笑顔の練習は欠かさずに行フフッ。」

「そんな練習どうやってやるんですか？」

「ん？ そんなの鏡を使って中に入る自分に笑いつづけるのさ。 そうすれば美しい笑顔を作ることができるよ。 君の家にも鏡はあるだろう。」

「一様鏡はあります。」

自宅の鏡の前で笑顔の練習をしている自分を思い浮かべる。うむ、家族に見られた俺はもう一生顔を合わせる事は出来なくなるかもしれない。絶対にしたくない、誰にもばれなくともだ。式戻さんはそんなことをずっとやっていたのだろうか・・・。

「ならば話は早い。家に帰つたら早速練習を始めるんだ。あ、でも君は暫く此処にいるんだっけか。だったらこの私が直々に笑顔の指導をしてあげよう。一週間もすればこの私のように笑顔の達人になれるよ、フフッ。」

「いえ、折角ですが遠慮しておきます。」

「別に気に欠ける必要はないんだよ。私は人のために何かをするの

が好きなんだ。自分にどんな害があつたとしてもね。それが死であつてもだ。ただのたれ死ぬよりも、誰かのために死ねた方が素晴らしいと思わないかい？」

「それは、あまり考えたことがないです。」

死ぬことについてどう考えたこともなかつた。寧ろこれから自分はどう生きる事になるのかしか考えたことがなかつた。

「そうかそうか。そりや そうだろうね。君は死にかけたことが一回しかないからあまり考えたことはないのかもね。でも、死ぬことについて考えておくのとても重要なんだよ。死というのは万物平等、誰にでも訪れる事なんだからね。そして、死を考える上で注意しなければならないのは自暴自棄にならないことだ。死を恐れてはいけないよ。今は生きているんだから。だからこそ高尚な死を迎えられるように、笑つて死ねるように、生きている時は精一杯生きなきやいけないんだよ。幕を閉じるなら素晴らしい舞台を演出したいじゃないか。だから私は、どうしたら美しい舞台を演出できるのかを考えているんだよ。」

確かに、あの夜以降俺にとつて死は遠い存在ではなくなつてしまつた。まだ成人すらもしていないので。のんびりした未来があつたはずなのだが、もう過去の話になつてしまつたのだ。“人生何が起きるのかわからない”とか言つていた人がいたが、“人生いつ終るかわからない”ということもあるのだろう。

「フフツ、そんな悩んだ顔をしなさんな。」

「いや、今のはあんたのせいなんだけど・・・。」

「フフツ、怖い顔をしないしない。そう言う時こそ笑顔だよ笑顔。」

うーむ、こちらの言葉は通じないのだろうか・・・。とか悩んでいたら医務室の扉が外側に開いた。そうやら朱鳥の治療が終わつたようだ。

「あら、式戻じゃない。こんなところで何やつているの？」

「おや？ 塑稀じゃないか。どうして君がこんなところに？」

「ここは医務室でしょ。私の領域だよ。<sup>ハイールド</sup>そしてまずは人の質問に答

えてから、質問をするべきじゃないの?」

「フフツほらほら、怖い顔になつていてるよ。女性は笑わないとシワが増えちゃうよ。」

「あんたに私の肌の心配をされる筋合いはないよ。」

「そうかそうか。」

やれやれと手を上げ顔を振る。

「実はだね、この翔也君とお話をしていたのだよ。楽しかったよ。実際に素晴らしいかった。」

満足そうな表情を浮かべている。しかしやは堪つたものではなかつたのだが。

「大方あんたが一人で喋つていただけでしょ?」「めんね翔也くん、迷惑掛けちゃつて。」

「いえ、大丈夫です。それで朱鳥の方は?」

「お嬢様なら問題はないよ、ちゃんと治療は施しておいたから。致命傷だつたみたいだけどこれ以上は酷くなることはないよ。時間はかかると思うけど。命に別条はないから安心しな。」

良かつた。どうやら命は助かつたようだ。

「最も的確な治療方法がね・・・」

「え、何ですか?」

「ん?何でもない気にしないで。」

何事もないような表情だった。もつとも何か含んでいいるような物言いだつたが。

「良かつたじゃないか翔也君。ほら笑顔笑顔、ニーッ。」

「ニーッ・・・。」

取り敢えず笑つてみる。あーもう、何でこんな時にこんなことをしているのだろうか。

「あーもうダメダメ。」

再び無理矢理口に入差し指を突つ込まれていた。

「ちょ、やへれくらはい・・・。」

「そつかそつか、嬉しいのか。」

いやちつとも嬉しくないのだが……。というよつ指を突つ込まれていてるので上手く話せない。

「ほり、式戻そろそろ止めなさい。」

そういうと？塑稀さんは俺を式戻さんから無理矢理解放してくれた。

「あ、ありがとうございます。」

このまま突つ込まれていたら逆に、これから笑うことが苦手になりそうだった。笑顔を強制されるのがこんなに恐ろしい事だったとは。

「フフツ、相変わらず？塑稀は強引だね。笑顔は大切なんだよ。病は気からとも言うじやないか。」

強引なのはあなたです。

「残念ながら翔也くんは外傷なの。外傷は気だけじゃ治らないわよ。ほれ、私も仕事するからあんたも仕事に戻りな。」

「フフツ、了解。んじや 翔也君また後で会おう。」

そう言つなり消えた。その場にいたはずなのに消えた。視界から消えたのだ。椅子の上から消えた。

思わず驚いてしまった。さつきはいきなり表れて、今度はいきなり消えたのだ。幽霊なのだろうか？まさに神出鬼没だ。

「言つておくけど式戻はお化けじやないからね？あいつ、気配を消すのがとても十八番なのよ。しかも、ただ消えるんじやなくて見せる人にとって空氣と同じように錯覚させるのよ。脳が消えたと認識させれるの。だから見えない護衛として働いているんだよ。」

どうやら式戻さんはただの護衛ではないようだ。確かに神眼を持つ武神家に仕える者として、そこら辺にいそうな只の強い人間では護衛が務まることはないのだろう。

「さて治療するわよ。右腕出して。」

袖を捲つて右腕を差し出す。見るとワイヤーで縛られた跡がクツキリと残っていた。服の上からだつたはずなのにここまで跡がついているとは。かなりの強さで縛られていたのだろう。

「成る程ね。意外と軽傷でちょっと驚いたよ。あるいは既に回復しているのかな？んじゃ軽く薬塗つて包帯巻いておくね。この分なら傷跡は残らないと思うよ。」

そう言つて薬を塗つた後に丁寧に包帯を巻いてくれた。どうやら口三兄妹の中で一番まともなのは？塑稀さんしかいないかもしだい。

「？塑稀さん質問を良いですか？」

「どうぞ。答えるものだけ答えましょう。」

「あ、はい。ありがとうございます。では何で眞さんお互いを呼び捨てなんですか？」

一番年上の弋人さんならまだしも、式戻さんと？塑稀さんは年の差のある兄妹なのだから呼び捨てにするのは不思議だ。

「あのね、私たち口三兄妹は三人そろつて一つなのよ。因みに年の差はそれぞれ年後だから、私と弋人の差は一年しかないのよ。そして私たちはお互いの存在が不可欠。誰が欠けてもならない。三人で一つ。三人で武神家の付き人としてその役割を全うできるのよ。」

三人で一つ。一人として欠ける事は許されない。きっと深い絆で結ばれているのだろう。でなければ武神家への付き人として完璧に仕事を行う事ができないのだろう。

「よし、治療は終了。これからさ豬轡さまに会いに行くんだっけ？」

そうだった。式戻さんのせいですっかり忘れていた。取り敢えず何を聞くか考えておかなければ。朱鳥のお父さんとは直で話すのは初めてだ。顔と顔を合わせたことが数回しかないだけで、会話を交わしたことないのだ。

「ありがとうございました。」

「気にしなくても良いよ。また何かあつたら此処にきなさい。どんな傷でも治療してあげるから。」

その時医務室のドアが短いノックの後開いた。そこには弋人さんがいた。

「ちょうど良い時間だつたみたいだな。では案内しよう。来なさい。

「

そう言ひと背を向けて歩き出した。俺は？塑稀さんに一礼した後、その後を追つた。

「全く、ただでさえ赭礪さまは忙しいところに」。手短にすませて下さい。」

そう言って、長くて、入り組んでいて、視界の悪い、迷路のよつな廊下を歩いて行く。暫くすると八枚も襖のある部屋にたどりついた。

「この中に赭礪さまがいらっしゃいます。お入りください。」

そう言って中央の襖を開ける。そこには、一人の男がいた。目は細く肩幅がしつかりしており見た目からして強そうだ。しかも只ならぬ気配を纏っていた。俺のよつな戦闘において素人な人間にもわかるほどだ。

その人物こそ朱鳥の父でもあり、神の名を統べる家系の頭首である武神赭礪たけがみしづるである。

この一連の出来ごと、特に赭礪さんとの出会いによつて俺の人生は決定的に決まった。これを境に俺は一度と十一日前の俺に戻ることは出来なくなつた。良い意味でも悪い意味でもだ。

「翔也くん久しぶり。こつして話すのは初めてだね。」

部屋に一歩入ると、朱鳥の父親である赭礪さんは腕を組んで座っていた。

「はい、お久しぶりです。」

只ならぬ気配にも関わらず、その口から出る言葉はとても落ち着いており優しかった。その差に面食らってしまった。

「そう固くならなくて良いよ。今日は君に話さなくてはいけないことがあるからね。落ちついて聞いてほしい。では、そこに座つてくれ。」

目の前にある座布団の上に座る。赭礪さんと一対一、顔を突き合わせる形になつた。式人さんは襖の外で控えているのだろう。

「まずは朱鳥を助けてくれてありがとう。」

そう言って深々と頭を下げる。

「いえ、そんな大したことしていないです。寧ろ俺のせいで朱鳥を危ない目に合わせてしましましたし・・・。」

そうだ、俺がいるから式神が現れて朱鳥をあんな目に合わせただ。俺にこそ原因がある。

「そう自分を責めないでくれ。原因の一端は私にも有るのだから。それに朱鳥も想像したほど重傷では無かつたし。回復には時間が掛かるみたいだが負い目を感じる必要はないよ。」

その重傷を負わせた式神 一体何の能力で朱鳥を倒したのだろうか。朱鳥を倒した一撃はまだ視線を合わせただけなのだ。あれが蒼い眼の力なのだろうか。

「あの、式神は・・・式神厭人は一体何の能力を持っているのですか?」

赭礪さんは少し考え込んだ後に口を開いた。

「大体はわかっているが・・・その前に、式神について君はどれだ

け知つているのかな。」

式神について 戰闘に入る前に確か飛鳥は“消えた家系”と言つていた。

「式神家はね十年以上前に一族諸共消滅したはずなんだ。嫌、自ら一族全ての力をもつて自爆したはずなんだ。」

「自爆つて・・・どういうことですか？」

「人類にとつて大きな災厄をもたらしたあの事件。一千九百二十三年に起きた世界中を巻き込む爆発が太平洋の中心で起きた。その原因が式神家だ。」

「そうだったんですか・・・。」

世界の科学技術の進歩を停滞させた謎の爆発。その因果関係は全てはつきりしていない。成る程、神眼という未知の力が関わっているようでは無理もないだろう。

「詳しいことは、私も良くわからない。何せ現場は分家の者にまかせていたからな。私たち本家は指揮をとつていた。」

「でも何故式神家がそのようなことを？」

「式神家はね、神眼を研究していたんだ。その成果は我々よりもはるかに質が高いものだつた。但しその過程において罪のない一般の人々を用いていたんだ。実験体としてね。よつて我々武神家がその肅清に向かつたわけなのだが、上手くいかなかつたんだ。後一步といふ所で失敗した。」

無念な表情を浮かべる。

「しかし、まさか生きていたとはな。しかも、朱鳥と同じくらいの年となるとあの時にやはり生き残りがいたんだろうな。今まで式良を使つて一様の対策を行つていたが、徹底的な対策を行う必要があるな。これ以上一般人の犠牲を出すわけにはいかないからな。式良、いるか？」

「はい、こちらに。」

いきなり、真横から声がした。急いで振り向くとそこには一人一人

笑っている式良さんがいた。

「おや、そんな口をあんぐり開けてどうしたんだい？それは笑顔の練習をして欲しいのかい、フフッ。」

と言いながら指を突っ込もうとしたため慌てて口を塞いだ。本当にこの人は神出鬼没だ。いつからここにいたんだよ・・・。

「式戻、それはまたの今度にしてくれないかな。」

「はい、わかりました褚攀さま。」

姿勢を正して正面に向き直る。流石に主の命令には逆らえないようだ。

「では、私の推測だが式神厭人の能力が何かを話そつ。」

二人とも真剣な顔になり、褚攀の話に耳を傾ける。

「？塑稀の話によれば、朱鳥は精神的ダメージを受けていたようだ。そして式神厭人が蒼の能力であることを踏まえると、操心術である可能性が高い。操心術というのは、心を読むことができ更に操ることもできる能力だ。発動条件は眼を合わせる事らしい。」

「つまり朱鳥は式神に心を操られて・・・」

「その通りだ。そして心の傷であるが故に適切な治療方法はわからないそうだ。ただ外傷ではないので命に別条はないそうだ。不幸中の幸いと言つやつだ。式神のやつが未熟である事も幸いしたのだろう。そこで式戻。」

「はい。」

短い言葉で返す式戻さん。その様子は普段の二口二口笑う余裕が見えない。

「蒼の能力、系統操心術である式神厭人を捕らえよ。今まで捕縛対象が曖昧だつたが今回の件ではつきりしたので、早急に動いてくれ。もし、捕縛が難しければ殺しても良い。情報に関しては引き続き式人から受け取ってくれ。」

「わかりました、仰せのままに。」

一礼した後にその場から霧のように消えた。

「さて、今度は君のことについてだ。」

褚攀さんが此方に顔を向ける。

ついに自分に関する話になり必然と姿勢が固くなる。

「薄々気付いているかもしないが、君も神眼の能力者だ。やはり、俺もそうだったのか。今更な気がしなくもない。

此処最近の状況を鑑みれば、神眼所持者でなければ生き残れるはずがない。

「しかも蒼の能力者で、その中でも珍しい種類なんだ。それが式神に狙われている理由かもしない。」

「珍しい能力とは・・・？」

確かに蒼の能力には幾つも種類があると式神さんは言っていた。その中でも珍しいものなのだろうか。

「ところで、君は他の人と比べて異常に回復速度が速くないか？」

「あー、はい。」

確かに俺は怪我の治癒能力が確かに速い。あの夜の件で負った大けがも今では綺麗サッパリ治っている。

「俺の身体の治癒能力は確かに速いですが、それでも直ぐに治るわけではないですし・・・。それが関係あるんですか。では俺の能力の名前は？」

「君の系統は永劫だ。」

「永劫・・・ですか。」

「永劫、つまり永遠。終わりがないもの。」

「君はその能力を覚醒させたが後、死ぬことが出来ないんだよ。」

「え、つまりそれは・・・。」

「どのような攻撃を受けても身体は治癒し、死ぬことはない。」

死ぬことはない、俺は永遠に死ぬことはない とんでもない事実に反応できない。

いや、でもそれは本当なのだろうか。赭攀さんを疑うわけではないが信じる事が難しい。どうして俺になんかにそのような能力が・・・。

「因みに、その覚醒は起きないように抑制させてもらつていてる。」

「え、どういう事ですか？」

「君が生まれた時に心臓に直接抑制の呪をかけさせてもらった。その呪がある限りは覚醒することはない。」

「何故、そのようなことを・・・？」

「死ぬことが出来ないというのはとても孤独な事なんだよ。とても辛い。生きるという事 자체が辛いというのにそれを永遠に続けなければならぬんだよ。精神が狂つていしまっても生き続けなければならぬんだ。そんな不幸なことはあつてはならないと私は考えている。」

死ぬことができない。

周りの人々、好きな人、大切な人。皆が死んでいく中生き続けなければならない。それはきっと哀しいかも知れない。生きるのが辛くなつても死ねない。正に生き地獄だ。

「そこで私と君の両親とで考えたんだ。結論として取り敢えずその能力の覚醒を抑える運びとなつたため呪をかけさせてもらつたよ。その能力の覚醒を君の意思で決めてもらうためにだ。」

「俺の親もですか？」

「そうだ、君のお母さんと私は昔からの知り合いでね。ま、この話は後日にしよう。」

全く知らなかつた。まさか知り合いだつたとは。

「因みに呪の解き方は心臓を直接突き刺せば良い。」

「え、心臓を突き刺すんですか・・・？」

首を縦に振る赭攀さん。

他に痛くないやり方はないのだろうか。かなりえげつない場所にかけられてしまつたものだ。死ぬことのない命を手に入れる代わりに、とんでもない痛みを味合わなければならぬようだ。

「自分で良く考えて判断してくれ。その思考力がもう君にあると私は信じている。」

「わかりました。自分で考えて判断します。」

満足そうに頷く赭攀さん。

「さて、これで式神に狙われてしまつた大体の理由は把握したと思

う。そこでうちの分家の者に君の護衛を任せようかと考えている。

本来ならば式戻を与えられれば良いのだが、あいにく式神捕獲に全  
力投球してもらいたいのでね。」

「いえ、全然問題ないです。寧ろ嬉しいくらいです、はい。」

俺の反応に首を傾げる赭攀さん。

こちらとしてはあの騒がしい人に護衛されるのはこまる。精神的なダメージが大きすぎるからだ……。正直内心ではかなり安心している。本当に良かった。

「そして分家のものだが、名前は神成梓かんなり あずさという者だ。紫の眼で重力使いだ。まだまだ未熟な所もあるが、戦闘の強さは私が保障しよう。後、一連の出来事が収まるまでうちに留まつてもらう事になるのだが大丈夫かな？」

「大丈夫です。どちらにせよ暫く学校には行けませんし。それに此処にいれば安心です。よろしくお願ひします。」

きっと此処は日本で一番安全かもしない。何しろ敵が敵だからだ。プロフェッショナルに任せるのが一番だろう。

「ゆっくりしていってくれ。君のお母さんには私から連絡しておこう。久しぶりに話してみたいものでね。では、式人に部屋を案内させるのでついていってくれ。梓については後ほどそつちに挨拶に向かわせるからよろしく頼むよ。」

「わかりました。では失礼します。」

一礼して部屋を出る。

そこには式人さんが無表情で立っていた。

「終りましたか。」

「はい・・・。」

「では此方へ。」

踵を返した式人さんの後をついて行く。

何か威圧的なものを凄く感じる。俺はかなり嫌われてしまつているみたいだ。暫く一諸に過ごすというのにこれでは行く先が心配だ。

「あの、これからよろしくお願ひします。」

「まったく、君のような部外者をこの家に置くことになるとは考えられない事だ。私は反対したが赭攀さまのご指示とあっては従わざるを得ないからな。くれぐれも迷惑をかけないでくれ。」

射抜くような目で睨まれる。身が縮む思いだ。目だけで人を殺せるんじゃなかろうか……。

「もし朱鳥さまの身に再び何かが起きようなものなら、私は君が悪くなくとも許しはしない。覚悟しておけ。」

とんでもない警告を受ける事になってしまった。というより理不尽な……。

この人だけは敵に回したくない。いくら情報管理担当と言へど、あの式戻さんの兄だ。只者ではないはず。

暫く薄暗い廊下を歩き続けある部屋の扉の前で止まる。

「さて、此処が君の部屋だ。後ほど梓を此処に来るよう言いつけておきます。挨拶をしておいて下さい。外出する際にも彼女は常につっこことになります。では何かあれば梓に申し受け下さい。」

無表情な顔で一礼した後に薄暗い廊下の向こう側に消えていった。部屋の中に入つてみると一人で過ごすには丁度良い部屋の広さだった。畳がはられており、窓からは周囲の森が見渡せる。中々の良物件だ。

神成梓か……どんな人なんだろう

名前しか聞いていなかつたので全く想像することができない。取り敢えず俺が望むのは普通の人である事だ。ただ、神眼所持者どうだからそれは期待出来ないのかもしれない。ま、何だかんだ心配してもしょうがないだろう。外れる時は大きく外れるものだから覚悟しておくしかない。

そして特にすることもないので、畳に転がり仮眠をとる。ふんー。畳の上だとやっぱり寝にくいな

俺は畳の上で寝るという事を経験したことがあまりない。昔から畳のある部屋がない家に住んでいたからだ。日本に住んでいるのこれ如何に……。

まだ日が傾き始めようとしている時間なので外は明るいがひとまず布団を敷くことにした。主人さんに見つかったら小言を言われてしまふかもしれないが、部屋の中までは入ってこないだろう。それくらいのプライバシーは守ってくれることを祈る。

しかし武神家の情報を全て握っているとなると、どうなんだろうか。

一瞬襖を開けようとする手が止まる。ま、でもそんな心配をしてもしようがないわけだ。

結局襖をあけて布団をしいて仮眠の準備を始める。

さて、寝るか。夕飯を食べるにはまだ時間があるだろう三時間は寝れるだろう。

そうして布団に潜り込んで眠りに落ちて行った・・・はずだった。布団の入っていたであろう襖の中から何かが落ちる音がしたのだ。

「いた――――――！」

襖の中から甲高い声が響く。どうやら仮眠することはできなさそうだ。

襖がゆっくりと開いて行く。

中から髪の毛を後ろに束ねた黒装束に紫色の帯を締めた女人人が出て来た。

「痛てててて・・・。えーとあなたが翔也さん？」

腰を押さえながら床に立ちあがる。

「ここにちは。私は神成梓。以後よろしく。主人さんの代わりになるかわからぬいけれどあなたの護衛をさせて頂きます。」

軽く頭を下げる。雰囲気からしておかしいといひはなさそうだ。まともでちょっと安心した。

「どうか、何でこんな時間から布団何か敷いて寝ようとしているんですか？」

首を傾げて疑問の表情で質問してくれる。

「いや、単純に寝たいだけだよ。」

「え、えええええ！」

顔を赤らめてあたふたし始める。ん、何か誤解をしているような。・。

「ちょっと待つて下さいー私は護衛を任されたのであって、そこまでするよには命を受けていないです。いや、で、でも今は翔也さんがご主人様だから従わなきやいけないのかな。で、でも初めては好きな入つて。」

目を回して更に慌て始める。

「ちょっと、落ちついてつて。」

マズイ。かなり変な誤解をされてしまつていいよ、だ。

「は、はい！」

さつきよりも心なしか顔が赤くなつてゐる。早く正さなければ。「俺はこれから軽く仮眠を取らうとしただけだって。君と寝るだなんて一言も言つてないよ。」

「な、なんだあ。良かつた。」

胸を撫で下ろして座りこむ。そんなに安心されると逆に傷つくな。・。そんなに嫌だつたのだろうか。

「では、私はお傍で控えさせていただきますね。」

そう言いながら枕元に正座してちょこんと座る。

む、これはこれで何故かとても寝にくいぞ・・・。といつよりこの子、意外と胸が大きい。黒装束だからわからなかつたが下から見るとわかりやすい。朱鳥とは違うな。

「ちょ、ちょっとどこ見てるんですか！」

腕を交差させて俺の視界を遮る。

「い、いや何でもない。所でさことに居られるととても寝にくいんだ。だから入口の近くの方で待機しておいてくれないかな？」

「は、はい！すいません。」

慌てて立ち上がり入口の方へ小走りで向かう。こちりで背を向けて正座する。かなり真面目ではあるようだ。

俺には考えなければならないことが沢山ある。

式神のこと。朱鳥のこと。俺の永劫の覚醒をビリするか。

でも、今考へても仕方のないことだ。  
俺の急げスキルの発動だ。そういうわけで俺は眠りに落ちて行つ  
た。

肩を叩かれて眼がさめる。身体を起すと傍に梓が座っていた。  
何か言いたげそうな表情だ。

「あの。夕食の時間ですので起きてく、ください。」

「ん、わかった。」

しかしこの子、未だに緊張しているのだろうか。口が上手く回つ  
ていない。これはこれで護衛として心配だ。でも、赭攀さんのお墨  
付きだから大丈夫か。

「そういうば夕食はどこで食べるの？」

「私がお持ちしました。下げる時も私がやるので大丈夫です！」  
机の上にいつの間にか夕飯が置かれていた。どうやら皆で集まつ  
て食べるという事はないようだ。

「ここ最近は皆さん忙しいんですね。なのでそれぞれが空き時間に夕  
食を食べている感じです。」

確かに俺以外の人は皆、式神のせいで大忙しなのだらう。寝起  
たせいか罪悪感をひしひしと感じる・・・。俺だけがこんなに暇を  
持て余していく良いのだろうか。

「そ、そうだ。夕食を取りながら色々お話ししましょう。私はまだ翔  
也さんの事についてわからなですし、翔也さんも私について殆ど知  
らないみたいですし。」

「そつか、それじゃ食べながらお互い自己紹介しようか。」

「一人で机に座り食事を食べ始める。」

「えーとんじや俺からいくかな。俺は生上翔也。神眼は何か蒼の眼  
らしい。系統はえーっと、永劫だつたけな。覚醒はまだしていない。

「えええええええ！」

そう言いながら梓は机から後ろに向かってひっくり返る。

「あ、蒼き眼で永劫！？な、何で私なんかがそんな方の護衛を！？

田を回しながらあたふたしている。そんなに驚くことなのだからうか・・・。

「いやもひ、それはもう国宝級ですよー」といつより世界遺産級ですよー。蒼き田というだけで國宝なのに永劫何て言つたらもう世界遺産です！」

「」の眼つてそんなに希少だったのか。

「まさか生きているうちに所持者の人と会える事ができるだなんて、ビックリです！」

さつきから急に興奮しつぱなしだ。どうやら感情が素直に出る子のようだ。

「で、では次は私ですね。」

一田箸を置く梓。

「えーと、私は武神家分家七の神成梓かんなり あずさです。神眼は紫の眼で能力は重力使いです。」

「分家七？」

「はい、武神家は十の分家を抱えていてその七番目が神成家なんです。」

「十つてこれまた多い数だな。それだけの分家を束ねているのか。因みに数字の割り当ては強さの順番になっています。私の家は比較的弱い方なんです。」

「待つて、重力使いつて結構強そうな気がするんだけど・・・。名前からして重力を扱うのだろう。だとしたらかなり強い気がするのだが。」

「重力使いという名前の通り、確かに私たちは重力を操作することができます。例えば敵の地面の重力を五十倍にして潰しちゃったりできます。」

「随分度と残酷な技を使う事が出来るようだ。」

「そんなことが出来るのに何で七番目なんだ？」

「実はこの力、制御がとても難しんです。強すぎると見方を巻き込んだり、はたまた自分をも巻き込んでしまうのです。結果、訓練中

に自滅してしまつ人が何人もいるんです。」

すこし悲しそうに頃垂れる。身近な人が訓練中に亡くなつたことがあるのだろうか。

「そんな感じで訓練に生き残つた人が武神家に仕える事を許されるんです。」

「じゃ君はその訓練の中生き残つた一人なんだ。すごいじゃん。」「は、はい。でも私これが初任務だつたりするんです・・・。」

あれ、ちょっと待つた。初任務と言う事は重力に巻き込まれて俺も潰れるなんて事故が起きるのだろうか。いくら怪我の治りが早いと言つても重力に押し潰されたら堪つたものではない。

「心配しないでください。極力潰さないように頑張ります!」

「いや待て、極力じゃなくて絶対に潰さないでくれよ!」

思わずこちらの声も大きくなる。益々心配になつてきた。プレスされる経験などいらない。しかも呪が刻まれた心臓も巻き込まれて潰され、呪が解けてしまうような気がするのだが。ただ呪が解けずにプレスされた後、徐々に治るものそれはそれで生き地獄。どつちになつても恐ろしい。

俺達は本来組み合わさつてしまつてはいけないペアではないのだろうか。

「精一杯頑張るのによろしくお願ひします!」

両手でガツツポーズをしながら円満な笑顔だ。

「こちらの心配を余所にやる気満々、もとい殺る気満々のようだ。」「ところで、さつきは寝る直前だから突っ込まなかつたんだけど。」「何のことですか?」

何の事だかわからず首を傾げる。

「何で君襖から出てきたの?」

「あれ、そんなことありましたっけー?」

とぼけるような表情で視線を横に流す。

「いやいや、俺の仮眠を邪魔したじゃんか。」

「んー覚えていたんですか。実は私の寝床がこの上なんです。」

「あれこの上に部屋何てあつたっけ？」

「いえ、この屋根の板挟んで一枚上です。」

「つて屋根裏で寝る気なのかよ！」

「あそこは人が寝る場所じやないような気がするのだが。う一式戻さんに言わないように釘を刺されていたのに……。」

「え、どうじうこと？」

式戻さんの指図とうばじうことなのだろうか。

「実は式戻さんは私の師匠なんです。それで今回この任務につくにあたって、翔也さんに気付かれずに何日間ここで寝られるかを指示されたんです。」

式戻さんが師匠だつたのか。何と氣の毒な。

「式戻さんは素晴らしい師匠ですよ。特に笑顔は一番です！」

笑顔を浮かべる。この子の笑顔ならずつと見ていても良いかもしない。

「もしかして笑顔の練習とか言つて指突つ込まれたりするのか？」

「はい。それはもう毎日、四六時中！」

良かつた。式戻さんが俺の護衛担当にならなくて本当に良かった。・・。あんな練習を毎日もやつていられない。

「式戻さんは強いですよ。“霧隠れ”っていう技が使えるんですよ。それで暗殺から白兵戦まで何でもできちゃうんです。私もある技使えるようになりたいな。」

そう言いながら表情を緩める。かなり憧れでいるようだ。その後黙々と一人して夕食を食べる。

「「ひちそうさま!」

「「ひちそうさま。」

言い終わった後直ぐに梓は食器をまとめ始める。

「では翔也さんはそのままで。私はこれを片づけちゃいますね。」

梓は食器を持ち上げ部屋から出て行った。

そう言えば朱鳥は大丈夫なのだろうか。ちょっと様子を見に行つてみよう。

梓も帰つてくるのに時間はかかるだろう。しかしこの屋敷は無駄に広いのでまだ道を覚えていなかつたりする。ま、探索ついでに回るのも良いだろう。迷子になつても誰かいるだろうし。

立ち上がり部屋を出て薄暗い廊下を何となく歩いて行く。相変わらず明かりは申し訳程度にしかない。更に今は日が沈んで夜になつてゐるのであるでお化け屋敷のようだ。

暫く長い廊下を何となく歩いて行く。すると向ひの側から誰かが歩いてきた。

「あら、翔也くんこんな所で何しているの？」

白衣をきた？塑稀さんだつた。これは運が良い。

「あ、どうも？塑稀さん。実は朱鳥の様子が心配だったので様子を見に来たんです。」

「成る程ね。でも今は面会謝絶中だから無理かな。」

「そんなに悪いんですか？」

命に別条はないとは言え精神的なダメージは大きいようだ。

「明後日へりにには会えるよつになるとと思うからそれまで待つてくれる？」

「はい、わかりました。朱鳥をよろしくお願ひします。」

「何言つているの、これは私の仕事よ。勿論全力で治療させて貰つてゐるよ。私任せなさい。そして、翔也くんは自分自身のことについて良く考えておきなさい。赭筆さまから聞いたよ。まさか永劫だつたとわねー。運が良いのか悪いのか。じゃ、私はこれで。」

そう言って俺とすれ違ひ廊下の向ひ側へと消えていった。

そうだな少し考えてみよう。

これから自分の事について考えるため部屋にいつたん戻る。どうやら梓はまだ帰つてきてはいないようだ。

永劫の力か。

永劫、死ぬことのできない力。とても魅力的だし、悪い所がないように思える。

ただ、自分が生き残り他の人が死んで行くのを見送らなければ

ばいけない。時間を共有できる人たちがいなくなつていいくのだ。

いなくなればまた新しい人間関係を作れば良いが、それは代わりにはならないだろう。代わりになる人間なんていない。人間一人一人の存在する力はとても大きいし多種多様だ。

やはり、この呪は解かない方が良いのかもしれない。

これが今の俺の結論だ。考える時間は五分にも満たなかつたが俺にとつては十分だ。

扉が開く音がする。梓が帰ってきたようだ。

「ただいま戻りましたー。あれ、何でそんな難しい顔をしているんですか？」

「いやなんでもない、気にしないで。」

「何かそういうこと言わると余計に気になります！」

ぐいっとこちらに顔を寄せて、俺の表情を読み取ろうとする。

「本当に大丈夫だつて。」

手で視線を遮つて押し返す。

「ところでさ、君の能力について一様見ておきたいんだけど見せてもらえるかな？」

「良いですよー。では、何か手ごろなものはないかな。」

そう言つて部屋中の探索を始める。暫くして小さな花瓶を持つてきた。

いや、花瓶つて大丈夫なのか？高そうな気がするが・・・。

そんな俺の心配を余所に花瓶を両手で掲げる。

「では、まずこの花瓶を浮かせてみますね。」

花瓶を手のひらにのせる。

「行きますよー！」

すると梓の眼が紫色に変色する。眼が怪しい光を放つ。それと同時に花瓶が浮きはじめる。

それを両手で操り、回したり、身体の周りを旋回させたりして飛ばす。

「おー結構便利そうだな。中々上手いじゃんか。」

思わず拍手をしてしまった。

「でも制御が難しんです。強すぎると花瓶が割れちやうので。」

と言いつつも氣前よく花瓶を飛ばし続ける。中々手慣れているようだ。

ただ、調子に乗れば乗るほど勿論手が滑るという事が起きやすくなるわけだが。

ピシッ

何かにひびが入る音がした。勿論その音源は飛んでいる花瓶意外にない。梓もその音に気が付き身体を硬直させる。

「お前、まさか・・・。」

梓の顔から血の気が引いて行く。そして慌てて花瓶を降ろして背中の後ろに隠す。

「い、いえいえいえいえいえいえ！問題ないです。では花瓶はこ、これ位にして。」

そう言って慌てながら花瓶を元あつた場所に戻す。あの花瓶いくらしたのだろうか・・・。

「で、では気を取り直してもう一つだけ見せます！」

氣を取り直して俺の前に達両手を横に広げる。すると梓を中心にして紫色の膜が半球円状に張られる。大きさは人が一人ほど入れるくらいの大きさだ。

「これは重力の結界です。何か物が飛んできても直ぐに跳ね返します。試しのそこの枕を投げてみて下さい。」

さつき寝る時に使っていた枕を取りに行く。よくよく考えたらこれをさつきの花瓶の代わりに使えば良かつたと思つたが、敢えて言わないでおこう。

「では私に向かって投げて下さい！」

「それじゃ行くぞ。」

枕を右手で持ち上げ、腕を大きく後ろに下げて力を溜める。

そして全力で枕を重力の決壊に向けて投げつけた。

ビシッ！

大きな音と共に枕が破裂してしまった。どうやらあの結界は跳ね返すというより、ぶつかって来たものを破壊してしまったようだ。

無残な枕は中に入っていた羽毛と共に散つて行つた・・・。

「お前、これはやり過ぎじゃないか……。」

外語欄の顔に先ほどのモード更に凸の鏡の音の音が青さめが表情になつていた。周囲の決壊を解除して頃垂れる。

「アーニー、お前が怒られる……。」

膝を抱え込んで沈み込んでしまう。

『愚かなら説明されはせぬとわがてぐれる』 僕も一緒に諭すからや。一

一様それなりのフォローをしてみる。

いきなり両手を掴まれて振り回される。本当に感情が素直に表面

へ出過ぎだ。どれだけ感情の起伏が激しんだこの子は！

「そんなことは、たが書を愛する限りは毛頭ないんだが

そう言って再び頃垂れる。そこへ部屋の扉からノックの音が響い

た。

木の幽鬼屋の音に詰々々笑ひながら笑う

抑揚のないトーンの声と共に部屋の扉が開く。

「JRの柵はまさか……。」

どうやら一番素直ほしくない人が音を聞いてしまったようだ。

惨状にため息をつく。

「あなた達は一体何をやってこられるんですか？」

射抜くような目線に俺と梓は思わず姿勢を正す。

「」は崇敬なる武神家なのですよ。しかも、その家のものを破壊するなど言語道断。特に神成梓。分家ともあろう者が本家の物品

を破壊するなど、一体どうこいつ神経をしているのですか。」「すいません……」

「顔を伏せてしょんぼりと肩を落とす。

「別に梓だけが悪いわけじゃないです。やつてみてくれと言つたのは俺なので。」

ため息をついて呆れる♂人さん。

「全く君達は……。今回は翔也君の顔に免じて見過<sup>ご</sup>しましよう。翔也君は赭攀さまの大切なお客様なのでね。しかし、次やつたら覚悟しておいて下さい。いくら翔也君でも許しません。その枕のようになりたくなければ、何もしないでください。私の堪忍袋の緒はそこまで太くないのでね。」

額に血管を浮かべながら睨みつける。

「はい、気を付けます。」

頭を下げる謝る。梓も揃えて頭を下げる。

「では、せめて片づけは自分たちで行つて下さい。代わりの枕は後で梓、お前が取りに来なさい。」

そう言つて踵を返して部屋から出て行つた。

扉が閉まつた音とともに力が抜けて一人してため息が出る。

「相変わらず♂人さんは怖いな。」

「あの人って人なんでしょうか。鬼にしか見えないんですけど……。」

床にへたり込んでしまう梓。

「あの人はやっぱり怖いな。俺なんかかなり嫌われているみたいだし。あんまり揉め事は起こさない方が良いな。」

「触らぬ神に祟りなしですよ。では、私が片づけるので翔也さんはそのまま待つていて下さい。」

「良いよ。俺も手伝<sup>うつ</sup>よ。」

「いいえ、翔也さんは今私のご主人さまです。主<sup>おも</sup>じを働かせるなんて言語道断です。ジツとしていて下さい。」

そう言つて梓は散らばつた羽毛を集め始める。一方俺は、仕方な

いので畳に座つてしまし時間を持つ。

その後新しい枕が部屋に来て取り敢えずは一段落した。

「さて、もうすぐで十一時になりますね。ではそろそろ寝ましちゃうか。私は屋根裏に戻りますね。」

布団の入つていた襖を開けて屋根裏に登りつと足をかける。

「いやわざわざ屋根裏に行かなくても良いんじやないか？俺に見つかったんだしや。」

「確かにそうですね。」

しばし考え込む梓。顎に手を当てて悩んでいるようだ。

「うーん、でもどこに寝れば良いんでしょうか？」

「此處で良いんじやないか？」

何故か再び顔を赤らめる梓。また変な誤解をしているのだろうか。

「で、ででも私男の人とその、寝たことないんですけど……。」

ちょっと待て、何かそのセリフはとても危ない発言でしかないように気がするのだが。

「これでも私はまだ十五歳なんです……。何でその経験というものは……。」

「いや、だから寝るつていうのは同じ布団つて意味じやないから。」

「え、そなんですか！？」

口をポカーンと開ける。そして更に顔を赤くしていく。

「え、じ、じゃ私勝手に変な妄想を……。」

「いや、だから落ちついで。取り敢えずお前も布団しつて寝ろ。」

「は、ひゃい！」

屋根裏から布団を引きずり降ろして、ぎこちない動きで布団を敷いて行く。そして頭の中まで潜り込んでしまつ。さて、俺も寝るかな。

新しくて少し固い枕に寝心地の悪さを感じながら俺は本日一度目の眠りに落ちて行つた。

ひつして武神家の一日田が終つた。

\*\*\*\*\*

一方、IJIは真夜中の鏡楼高校の屋上。まだ寒い風が屋上を吹き抜けていく。

そこに式神厭人と式良が相対していた。

厭人は半ズボンに上は身体に張り付くようなシャツを着ている。一方の式式は黒いスースを着て髪型は綺麗に整えられたオールバッタだ。その長い髪を風になびかせている。

「フフツ、やつと見つけましたよ。」

相変わらずニコニコと笑みを浮かべながら厭人を見る。

「はん、今まで一度も俺を取り逃がしておいて捕らえられるとでも思つてんのか？」

厭人は酷く歪んだ口に笑みを浮かべながら余裕の表情だ。

「三度目の正直です。しかも今回は殺しても良いという指令が出ています。まさかあなたがあの忌まわしき式神家の生き残りだったとはね。私も本氣で活かせていただきますよ。」

そう言うといつの間にか式良は剣を握んでいた。刃はとても長く

一メートル半はあるだろう。その刃は黒く光っていた。

「へー、武神家の護衛ともあろう人が西洋の剣を使うとはね。これは以外。」

「この剣に名前はありません、無名なんですよ。名がついてしまうとその名に縛られてしまうのでね、フフツ。」

「それは面白い考え方だな。んじゃ俺の小刀　牢刀　とどちらが強いか試してみるか？」

そう言つて黒い手袋をはめて小刀を取り出す。

「そのようなおもちゃで私に勝てるなども考えているのですか。今はもうあの神器を失つていいのでしょうか？命乞いをすれば命だけは助けてあげますよ。」

式良は無名の剣を左手に持ち構え、姿勢は正したままだ。

「あんなのは飾りだ。これ一つで俺は十分だよ。」

厭人は顔の前に逆手で小刀　牢刀　を構える。足は左足を前に右足を後ろに、姿勢を低くする。

「最も、飾りだからこそ使わなきや花がないよな！」

そう言つと左手を大きく右に引く。すると式戻の周囲に青白く光るいくつものワイヤーが襲いかかる。

「フフツ、やはりストックはありましたか。しかしこれは私には効果がありませんよ。」

姿を消す。霧隠れの技だ。ワイヤーは虚しく空を切る。

一方の式戻は厭人の五歩前に現れる。その様子に驚くことも無く厭人は後方へ高速で移動して距離を開ける。

「あなたのその動き、ワイヤーを使つてているのですか。成る程、色々な使い方があるのですね、フフツ。ならばこの邪魔な糸を細切れにするまでですね！」

式戻は剣を大きく振る。すると周囲を剣撃が襲い幾つかのワイヤーを切断していく。

「あんた神眼を持つていないので、中々やるじやんか。でもそんなじや全てを切ることなんてできないよ。ここは既に俺のフィールドだ！」

満足そうな酷く歪んだ笑みを浮かべる。

「今度はあんたを細切れにしてやるよ。」「

「フフツ、甘いですね。」

式戻の未だに余裕な表情に厭人は警戒心をさらに強める。

「私はね、逆境的な状況こそ打破するのを得意とするのですよ。これはあなたたのフィールドであると共に私のフィールドでもあるのですよ、フフツ。」

構えを変えて、剣の柄を顔の横まで持つていき剣先を斜め下に下げる。式戻独特の構えだ。

「それじゃ、誰が此処のフィールドを制するかやつてみようじやないか。」

「フフツ、望むところ。そしてあなたを今度こそ捕らえましょ。」

式戻の言葉が終るとともに戦闘が始まった。

窓から見える空は曇り一つない快晴。差し込む日の光もとても心地よい朝だった。

梓に朝八時に無理矢理起こされて朝食をとる。まだまだ寝ていたのにそれに關しては聞く耳を一切持ってくれない。

「序ですでの翔也さんの悪習である、だらけきつた生活習慣を治しちゃいましょう！ そうすればお嬢様にも誉めて頂けると思ひるので是非一緒に頑張りましょう！」

という梓のやる気満々な希薄に押されて結局起きる事となつた。折角の休みだから寝ていてに・・・。何て時間の勿体ない。意識のはつきりしない状態で朝食を食べ終える。昨日の夕飯と同じように梓は食器を片づけて出て行つてしまつた。よし、この隙にまた寝るか。

そして布団に再び潜り込み眠り込む。一度寝こそ最高の幸せだ！しかし、そんな心地よい眠りも今度は別のものによつて妨害されてしまう。携帯が鳴つたのだ。

画面に出ている名前を見ると「下光葉平」という名前が。髪の毛が緑色の双子の弟の方だ。性格はとてもお氣楽で人思い。兄の方は性格は逆であり頭が良いが理屈を優先させるタイプだ。ここまで対極的な双子も珍しいのではないだろうか。

そんな双子の弟からの連絡だったのでどうせ下らない話の内容なのだろう。ということで俺は無視し続けた。

いつもならば一回位で着信は止まるはずなのだが・・・。今日は違つた。

何度も何度も鳴りつづけるのだ。無視を決め込んでいるのにこんなにかけてくるとは予想外である。結局この着信は梓が部屋に戻つてくるまで鳴りつづけた。

「翔也さん、携帯なつてますけど？」

部屋に戻るなり鳴り続けている携帯を手に持つて差し出してきた。

「いや、無視しちゃって良いよ。どうせ下らない事だから。」

「あのー、下らない内容のために三六回も電話をかける人なんかこの人？」

いつの間にやらそんなにかけていたのか。これはちょっと珍しきるな。そんな大切な事でも起きたのだろうか。仕方ない一度出でみるか。

「もしもし、日曜日の朝っぱらから何の用だ？」

「あ、やっと出たか！おいお前どんだけ無視する気だよ！でも、今はそんなことは良いや。それよりもヤバいぞ高校が！」

大きい声で喚くように喋る。背後からはパトカーの音や人のざわめき声が聞えて来る。

「一体何が起きたんだ？高校で何かあったのか。」

「何があつたも何も、屋上が崩れ落ちてんだよ！」

屋上が崩れている？今一言つていることの意味がわからない。大きな地震が起きたわけでもあるまいし。火事とかが起きたのだろうか。

「しかもただ崩れているんじゃないんだよ！校庭にまで破片が飛んできていて、もう半壊の状態なんだよ！お前も見に来いよ。」

「えー、見に行つてどうするんだよ下らない。じゃあな。」

「あ、おい翔也！」

携帯の通話終了ボタンを押す。

学校が半壊しているのか。ま、これはこれで休みの期間が更に延びるからある意味吉報なのかもしない。

「あの、翔也さん何かあつたんですか？」

「何か俺の通つている高校が屋上から半壊したらしいんだ。」

「ええええええ！」

大袈裟なという反応をする梓。

「見に行きましょうよ！」

興味深々のようだ。内容を教えてしまったのは失敗かもしない。

この子なら興味を持たないわけがなかつたか。寝起な頭が上手く働かなかつたせいで失敗してしまつた・・・。

「良いよ面倒くさいから。んじゃ寝るね。」

「だ一めです！」

そう言つて掛け布団を無理矢理はがされる。

「ご飯食べた後に寝ると太っちゃいますよ。身体動かさないと！ほら運動がてら翔也さんの高校に行きましょうー！」

結局押しに弱い俺は梓に無理矢理行くように説得されてしまつた。仕方なく出かける準備をする。

「では行きましょう！」

梓に手を引っ張られながら部屋を出る。すると田の前に式人さんが立つていた。思わず身体が固まる。梓も驚いて動きが止まつてしまつたようだ。

そんな俺らの不自然な状態に気を止めることなく口を開く。

「あなた方はこんな朝早くから何処へ行こう！？」「こののですか。外出するのは出来るだけ控えて下さい。翔也君は今狙われているのですよ。」

こちらを見据えて話す。一方梓は頑張つて口を開き話をそつとする。昨日の今日である。式人の前ではあまり下手なことは出来ないのだろう。

「いえ、あの翔也さんの高校で事件が起きたらしくてその様子を見に・・・。」

目を横に下に反らしながら話す梓。そんな不自然な動きに注目もせざいきなり考え込む式人さん。

「ふむ、そうでしたか。あなたにしては中々良い勘をしていますね。」

「え？」という表情になる梓。俺も頭の中に疑問符が浮かぶ。良い勘とは一体どういう事なのだろうか。単純に気の向くままの行動を梓はしただけのはずなのだが。

「実は昨日の夜を境に式人との連絡が途絶えているんです。」

「えええええええ！ 師匠ですか！？」

さつきの声よりも数倍の声で驚く。

「私もその高校の情報については手中にありましたが、別件の情報について確認しなければならないのです。なのであなた方に任せましょう。鏡楼高校の様子とその近辺を探つて式戻に関する情報を見つけて下さい。もし本人を見つけた場合は至急私に連絡下さい。では。」

言うだけ言うと踵を返して廊下に向こう側に消えていった。その姿が見えなくなつてから梓が口を開く。

「まさか、師匠がやられたんじゃ・・・。」

「そんなわけないだろ。だつてあいつ強いんじゃないのか？」

「確かに師匠は強いです。しかし神眼所持者ではありません。だからもし神眼所持者、それこそ式神と戦いになつたらどうなるかわかりません。」

「え、そうだったのか。」

霧隠れ何ていう技を使えるのだからすっかり何かの神眼所持者と思つていたがどうやら違うようだ。

「取り敢えず連絡が取れないとなると心配です。最悪の場合拉致されている可能性があるので、急いで探しに行きましょう。」

梓が慎重な面持ちになる。予想以上に自体は深刻なようだ。万が一式戻がとらえられているようなことがあつたら予想されるのは・・・  
・俺の眼との取引なのだろうか。でも、覚醒していないから材料にはならないはずなのだが。

「式神の考えていることです。きっと強引に覚醒させられるかと思ひます。なので急いで事実確認をしましょう。」

取り敢えずは式戻さんの所在をはつきりさせることにした。武神家を出る。

早足で鏡楼高校へと向かう。近づいて行くにつれ日曜日にも関わらず人の数がとても多かった。そして校門の前にはパトカーが数台停まり警察官が進入規制をしていった。そして肝心の高校は・・・。

屋根が吹き飛んでいた。いや屋上が吹き飛んでいた。上一階部分の壁も窓も無くなっていた。校庭にはその破片が散らばっている。その校庭にも所々穴が開いており、まるで爆撃機が通過したような状態になっていた。このような事が起きる戦いと言えば、あの二人しかいないだろう。

どうやら本当に激突したようだ。

「梓、君神眼や神器を使用したかどうかの検索つてできるのか？」  
「は、はい？」

目の前の凄惨な状況にビックリしていたようで、意識がどこかに行っていたようだ。これが初任務なのだからこのような光景を見るのは初めてなのかもしれない。俺も昨日の式神と朱鳥の対戦が初めてだったからこれで一度目ではある。

「一様私もそれは出来ますが・・・。校門からだと距離があるのでちょっと難しいです。ただ幾つかの破片の壊れ方を見ると少なくとも師匠がここにいたことは確かです。」

「え、破片でそんなのがわかるのか？というか此処から破片の距離まで相当な距離があると思うけど・・・。」

破片があるのは校門側からだと小さなものしかない。拳程度の大きさのものばかりだ。校舎側に行くと人一人分くらいの大きさの破片もあるが、此処からだとそれこそ拳程度の大きさにしか見えない。「私、これでも視力は良いんですよ。というより神眼所持者の人たちは基本的に視力が良いですよ。能力を使っている時は見ようと思えば、十キロメートル先の本の文字でも読むことができますよ。」

ちょっと得意げな表情で解説をする。

しかし、神眼所持者は一体どういう視力をしているのだろうか。といよりそんな遠くのものが見えていてもしょうがないと思うのだが。そうか成る程、俺の視力が他の人よりも良かつたのはそれが理由か。でも覚醒前だからまだそこまで視力はない。

「そして、大きな破片の綺麗な切り口を見るにあれば師匠の剣撃の跡だと思います。」

「剣撃つて何だ？」

「何と言えば良いのかなー。剣撃つていつのは、剣の斬る衝撃波を飛ばす技のことです。なので一つの場所にいるだけで周囲を攻撃することができるんです。近距離武器であると共に遠距離武器として使えるんです。」

あの人そんな技も使えたのか。逆にそこまでできないと神眼を持つ武神家の護衛は務まらないという事かも知れない。

「しかし、中の状況を見なければいけないです。もしかしたらあの校舎のどこかに師匠がいるかもしれません。」

「それはあるかもしねないが、警察がいるせいで中に入れるわけがないだろ？」

「そこには武神の名前を使っちゃいましょう。ちょっと待って下さい。」

そう言つて人を搔きわけながら警察官の方へと向かつていった。

「お、翔也じゅんかいいた。」

梓に入れ替わるように後ろから声をかけられる。どうやら葉平のようだ。何故か制服を着ていた。

「お前、なんで制服着ているんだ？」

「あ、ああこれは今日部活だつたからだよ。うん。」

「そうなのか、お前つて何の部活入つてたつけ？」

「俺は剣道だよ。といえば朱鳥のやつ倒れたんだつて？全くこれら大会があるのに主将が休んでどうするんだよ。」

確かに葉平は肩に細長いケースを持っていた。どうやら大会前の練習をするつもりだつたのだろう。

「どういふか、朱鳥つて剣道部の主将だつたんだな。知らなかつた。」

「そりや今月からだからな。ま、そもそも去年から主将になつて以來なかつたのに驚きだよ。あんだけ強いのにさ。だから大会に出てくれないと結構困るんだよなー。ま、そもそもこの様子じゃ俺も練習できなさそうな気がするけど。体育館も被害にあつてるみたいだし。」

体育館を見てみると屋根に大穴があいていた。さっきは気付かなかつたがどうやら屋上の大好きな破片の一つが体育館の屋根に穴を開けて落ちてきたようだ。

「しかし、何でこういうはた迷惑なことするかな。」

葉平はため息をついて項垂れる。大会目前にこのような大惨事を起こされでは確かに迷惑だろう。

でも何でこんな大規模な破壊活動が行われていたのに誰も気がつかなかつたんだろうか。

爆撃機が通過したかのような凄惨な状況だ。誰かしらが気付いても良いはずだが。

「なー、昨日の夜とかに誰か気付かなかつたのか?」

「ん、それはわからないな。俺は早く寝ていたし。」

「どうやら葉平も知らないようだ。」

「んじや俺はそろそろ帰るね、お前も何か気を付けろよ。」

心配そうな声をかけられる。

「大丈夫だよ。」

「本當か? 何か困ったことが俺に何でも言えよ。じゃあな。」

そう言つて葉平は人を搔きわけて校門と反対側へと出て行つた。そこへ人込みをかき分けて校門側から梓が戻ってきた。

「翔也さん、校舎に入れることになりましたよ。」

「お、本當か? ジャサツと入ろう。」

人込みをかき分けて校門の方へ向かう。すると警察官が道を開けてくれた。その警察から突き刺すような視線を感じたのは気のせいだろう。

校庭を歩いて校舎の方へと向かっていく。

「でも、こんな風に壊せるほど師匠と式神は強いのですか。」 いうのを見ると私に護衛が務まるのか心配になります・・・」

自信のなさそうな表情を浮かべる。これだけの状況を見せつけられたら、ある自信もなくすだろ?」

「戦わなくて良いよ。梓が危ない目にあうことはないよ。昨日の夜

の結界を使いながら逃げれば良いし。」

「戦わなければ護衛は務まりません。私の命に代えても守りますよ、絶対に。」

真剣な目で俺を見据えてくる。どうやら覚悟は相当あるようだ。  
と言つても俺は早々致命傷を負つても死ぬことはないので、多少の事は大丈夫なのだが。いざとなつたら俺が身体を張れば良いだけだ。  
校舎に近づいてくると大きな破片が目立つようになる。幸いなのはどれにも血痕が付いていないことだろうか。そして久しぶりの校舎の中へ入る。

中もかなり酷い状況だった。壁といつ壁に大きく綺麗な剣撃の跡が残っていた。

「翔也さん、この校舎って確か四階建てですよね。」

「うん、そうだよ。一階が職員室で二階が三年、三階が一年、四階が一年の教室だな。今はその四階が半分吹き飛んで切るけどね。」

「どうやら屋上から下の階へと順々に移動して戦つていたみたいですね。最後は校庭ですか。」

これだけ一つの大きな建物を壊して行つているから、きっと長期戦だったのだろう。

「では使えるかわかりませんが階段を上つて行ける所まで行きましょ。」

そう言つて校舎の端になる階段を手指して歩く。廊下も所々穴が開いており、歩きにくくなっていた。

そして階段の直ぐ横にある職員室を通りかかった時だ。中から物音がした。

その物音に反応して俺の前に梓が立ち塞がる。

「翔也さんはちょっと下がつていて下さい。私が中の様子を伺います。」

職員室の扉のない入口から中の様子をう窺つ。中もかなり酷い状況だった。机という机が壁際まで吹き飛ばされており沢山の紙が地面に散らばっていた。

その中央窓側に壁に寄り掛かるようにして倒れている人が。

「師匠！」

急いで式戻さんに駆け寄る梓。俺もその後に続き向かう。

「師匠！大丈夫ですか師匠！」

大きな声で式戻さんに声をかける。周囲には血の海ができていた。

「フフツ、梓、じゃないか。」

いつものように笑顔だがその顔には生気があまりない。

「翔也さん、急いで武神家に連絡を入れて下さい！私は師匠の治療をするので。」

そういうと自分の見につけていた紫色の帯を引き裂いて治療を始める。

俺も急いで電話をかける。すると式戻さんが電話に出た。

「はい、武神です。」

「式戻さんを発見しました。まだ校舎の中にいました。かなり大怪我をしたいます。」

「わかりました。では分家一の仁居神じこがみの者を回収に向かわせるのでそこにジッとしていて下さい。くれぐれも警察などに話さないようにお願いします。」

弟の一大事というのにとても冷静な反応だった。そこにちょっと違和感を俺は覚えた。でもこの状況でそんな事を言つても仕方がないので、それを飲み込む。

「梓、今式人さんに連絡したら仁居神ってやつが来るみたい。」

「わかりました。此方も一樣の応急処置は完了しました。」

式戻さんの身体には幾つもの紫色の布で縛られていら。取り敢えずは大丈夫なようだ。

「フフツ、まさか、君達に、助けられるとはね。」

「あまり喋らないでください師匠。肺にも折れた骨が食い込んでいるんですからジッとしていて下さい。」

梓は式戻さんを横たえる。

そこへ俺と梓の間にいきなり人が現れた。年は二十歳くらいだろ

うか、女性のようだ。髪の毛は短髪で黄色いパーカーを着ていた。

「仁居神鎧只今参りました。」

落ちついた表情で自分の名前を告げる。

「式良さまを回収しに來ました。」

そういうて式良さんのもとに歩いて行き抱き上げる。

「神成梓、迅速な処置をよく行いました。その調子で護衛対象もしつかり守つて下さい。」

俺の方を見据えて言う。

「私はこのまま？塑稀さまの元へと届けますので。では。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「ちょっと待つてく。」

そう言つて式良さんが引き止める。

「式神に関してはいくらか傷を負わせておいた。だから暫くは動くことは出来ないはずだ。逆に式神を発見して倒すのも今がチャンスだ。」

「わかりました。」

梓は式良さんの手を取りながら頷く。

「そして、笑顔を忘れずにフフッ。」

「はい。」

梓も綺麗な笑顔を作る。

「では、そろそろ行きますね。」

そう言つと鎧さんは式良さんと一緒にどこかに行つてしまつた。

「ところであの鎧さんだけど、あれも霧隠れなのか？」

「いえ仁居神の人たちの神眼能力はテレポートです。移動距離は人それぞれですがその中でもあの鎧さんはその中でも一番です。」

「そうなのか。つまり怪我人の搬送にはもつてこいなのか。テレポート言う能力もあるのか。神眼と言つても多種多様な種類があるようだ。」

「ところで、どうやら式神も手負いのようですね。でしたら今がチャンスです。急いで場所を突き止めましょう。」

抑揚のない声で話す。どうやら式良さんをあそこまで痛めつけたことが許せないようだつた。

「そうだな、そのためにもこの校舎の探索を続けよ。」

職員室を出て階段を目指す。どうやら階段は使えるようだ。所々穴があいているが心配はないだろう。

階段を上つて、各階の様子を見ていく。どの階も壁という壁に傷ができるおり所々には人一人分が入れるような大穴も開いていた。そして四階。本来ならば見えるはずのない青空が上から覗いていた。

「此処が一番酷いですね。」

全てのものが壁に寄せられるように吹き飛んでいた。教室を隔てていたであろう壁は全て無くなつていた。ここに教室が会つたのかも疑わしい。それがわかるのは壁側に寄せられた机や真っ二つになつた黒板を見る事によつて判断するしかない。

空は青空なのにこの荒廃した様子。その合わなさがより一層この凄惨な状態を際立たせていよいよだつた。

その中心に一人の人がいた。

梓は俺の前に立ちふさがりその一人の様子を伺う。

二人とも水色の浴衣をきており、顔には狐のお面を被つていた。背の大きさからして梓と同じくらいの年によつだ。

「あなた達は誰ですか。」

梓が静かな声でたずねる。その声に反応したかのように此方の方を向く。

「お前が」

「生上翔也か。」

右から左へと一人が途中まで喋り、残りをもう一人が喋る。

「だつたらどうするのですか。」

梓が答える。攻撃の構えをしており臨戦態勢だ。それに対しても前の二人は暫く沈黙した跡に話しだす。

「生上翔也ならば」

「捕らえるだけだ。」

そう言うと一人はそれぞれナイフを取り出した。その形状は独特な形をしていた。デザイン性が重視されているような形状だ。それを一人は右手、一人は左手に構える。

梓も手を構えて紫色の球体を出す。

「邪魔をするなら」

「まずはお前を殺す。」

二人はお互いの距離を取りながら梓を挟みこむために走り出す。

「翔也さん、下がついて下さい！」

「待て、お前はどうする気だ！」

「逃げながら戦うにしても二人が相手では難しいです。まずは一人を倒します！」

そう言つと狐のお面を被つた一人に向かつて駆けだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0782w/>

---

BLUE EYE 碧き眼

2011年10月10日03時26分発行